
『東京リアル図書館戦争』

統合失調症無職青年

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『東京リアル図書館戦争』

【Nコード】

N3235L

【作者名】

統合失調症無職青年

【あらすじ】

二〇一〇年五月。東京都青少年健全育成条例改正問題で、日本の漫画界は荒れていた。この改正案は、アニメや漫画などに登場する十八歳未満のキャラクターも「非実在青少年」と定義し、内容によって不健全図書指定にすることができるというものであった。改正案を成立させようと目論む原石慎太郎東京都知事と警察官僚たち、日本漫画界の危機に、ゼロのコスプレをしたニート河村英樹が、もうひとりのゼロ、ロリコンニート、ショタコンニートとともに、再び降臨する！

第一章 ゼロ、再臨

これは、2010年五月、東京都知事・原石慎太郎が推進する東京都青少年健全育成条例改正案に敢然と立ち向かった四人の勇者――四銃士の戦いの記録である。

白髪頭の老人が窓の外を眺めている。

「何が見える？ 東京の支配者の目には、この街はどう映る？」

老人一人しかないはずの部屋で、男の声が轟いた。

「俺が支配者だって？ 俺はそんなことは一度も思ったことはない。誰か学者が言っていたが、政治なんぞ、所詮三流の仕事よ。芸術には遠く及ぶまい」

「そう卑下することもないだろう、閣下。それはお前の本心とは思えんが」

老人の顔に苦笑が浮かぶ。

「閣下？ やめてくれ。何の冗談だ」

「2ちゃんねるあたりでは、お前のことを閣下と呼んでいるぞ。どれほどの尊敬の念が込められているかは知らないが」

「あんなはきだめ。この一件済んだら、俺が規制してやる」

「ほう。はりきっているな。ということは、四期目もあるというこ

とか？」

「この巨大都市を上手く治められる男が、俺以外に他に誰がいるってんだよ」

老人はしまったという顔つきとなった。それは悪戯っ子が悪戯をしているところを大人に見つけられたときの顔に似ていた。

「やはり支配者気取りか。それもいいだろう。そうだ、原石、お前に伝えねばならないことがある」

白髪頭の老人——東京都知事・原石慎太郎は途端に真剣な表情となった。

「何だ」

「来る」

「何が」

「四人組が来る。お前を倒しにな。今回の一件が原因だ」

「なぜそれを俺に知らせる、サタン？」

サタンと呼ばれた声は答えた。

「言わなくてもわかるだろう。面白くなりそうだからだ。俺らの最大の楽しみは、お前ら愚昧な人間どもが相争うことにあるのだから」

腹の突き出た男が、着替えをしている。ズボンをはくのに四苦八苦していた。

「行くのか、河村」

女が男に問うた。

「ああ。俺が行かなきゃ誰が行く？ この危機を打開するのは、何だかんだ言ってもはやこの俺しかない。真綾、それはお前も知っているんじゃないか？」

「しかし、何も河村さんひとりがすべてを背負い込むことはないんじゃないですか？」

三十代くらいの男が口をはさんだ。

「ODよ。もうこの国で決起して男を見せることができるのは、飼いなされたサラリーマンや国民の血税で好き勝手する公務員どもなどではなく、俺のような自分探しの旅に出ている旅人にしかできないことなんだよ。お前たちが止めても、俺は行くぜ。この一週間、お前たちから教わったことは、決して忘れない。……グレール・シュ潤はどうした？ 姿が見えないが」

「トイレに行くとか言っていたが」

女が答えた。

「そうだったな。便所か。大ならしょうがないな」

「なぜ大きい方だとわかる？」

女性が怪訝な顔で言った。

「そんな顔してたぜ？」

河村と呼ばれた腹の出た男は、上着を着て、手袋をはめ、ヘルメットのようなマスクを着用した。リュックサックを背負い、ラジカセを手にした。

「気をつけてな、河村」

「違うぜ真綾。俺はもう平成の救世主ゼロ様だ。悪の都知事から日本の漫画界を救う英雄だ。じゃあな。ちよっくら都知事ヤッてくるわ」

「ゼロ。無事で帰ってきてくれ。またチャンバラごっこをして遊ぶ」

真綾は河村を見送った。

河村は玄関へ向かい、外へ出た。

「あれ？ 河ちゃんはどしたの？」

ハンカチで手を拭きながら男が訊ねた。

「もう行きましたよ。長かったですね。やっぱり大きい奴ですか」

ODが微笑みながら訊く。

「何でわかったの？」

グレルルーシュ潤こと福山潤は狐につままれたような顔をしながら、ハンカチをズボンにしまった。

「いえ、そんな顔してたとか河村さんが言っていましたよ」

「顔？ 顔でわかるの？ 顔に出るの？ じゃあさあ、大顔とか小顔とかあるわけ？」

「さあ」

ODが困惑気味の顔をした。

第二章 ショタコンニート、精神に静かな炎を宿らせる

眼鏡をかけた若い男が、一心不乱にパソコンのキーボードを打っていた。近藤春雄、二十三歳。大学中退の無職男性である。

（この戦い、絶対に負けるわけにはいけないのである。春雄はこの戦いにすべてを賭けるのだ）

近藤はいわゆるショタコンで、少年を愛する男であった。だからといって犯罪歴はなく、あくまで嗜好の上での話だった。近藤の本棚には、ショタコン向けの漫画や小説がずらりと並べられている。

近藤は東京都が推進する青少年健全育成条例改正案に断固反対の立場で、ネットで反対運動をしていた。

（こんな悪法が成立した暁には、東京からショタ漫画が消滅することになってしまうのだ。春雄が思うに、これは二〇〇五年のコイジユミ政権以来の危機である。このような表現規制は、ショタコンの名にかけて、オタクのひとりとして、何が何でも、是が非でもこの条例案を潰すしかないのである。しかし、反対メールやブログだけでは、本当に潰せるのかどうか心もとないところではあるのだ。さて、そこが悩ましいところである。どうするべきか？ うん？）

近藤はアメーバブログの記事を検索していて、ひとつの記事を目にした。「リアル図書館戦争って呼称、おかしくねえか？」というタイトルのものであった。ブログタイトルに「廃人ニートは小説を書けるか？」とある。

「廃人ニートがリアル図書館戦争について物申すか。面白い」

近藤はクリックして、記事を読む。そこには近藤の心胆を寒からしめる文章が綴られていた。

——規制反対派はさ、「表現規制反対」とか言ってるけど、本質はエロ漫画規制たる？ エロ漫画規制反対ってなぜ言わない？笑。

——俺一応東京都民で反対の立場だが、何にも活動してないよ笑。

——人間一人にできることなんてたかが知れてるわけで、俺一人が何やろうが、成立するもんは成立して、不成立するもんはそうなるわけよ笑。

——どうせできることなんて、メール送ったりデモや集会に参加することくらいだろ？ ひとり増えたり減ったりしたって、大勢に影響はないよ笑。

近藤は読み終わると、すっかりテンションが下がってしまっていた。

（……悔しいが、この御仁の言うとおりである。しかし、ここまで言うか。春雄はテンションがた落ちである。再起できぬほど意気消沈してしまったではないか。どうしてくれるのだ廃人ニート。このまま春雄が戦線から離脱したために、それが原因で改正案が成立してしまつたら、どう責任を取ってくれるのか。いや、そうなる公算は大である。この春雄の活躍があつたからこそ、コイジユミ政権の児童ポルノ法改悪は阻止できたのではなかったか。廃人ニート如きでは、裏の世界のことなど知るまいから、まあ、仕方のないアクションではあるな。いかんいかん。廃人ニート風情の戯言に振り回されてはいけないのである。春雄よ、ここは英気を養うべきときである。……いや待て。英気など養つてどうなる？ 廃人ニートの言にあるように、メールなどしても何になるというのだ？ その効果は疑わしい。やはり、強烈な結果が期待できるのは）

近藤は携帯電話を手に取り、ある人物に電話をかけた。

（最近は連絡をとっていなかったから、出てくれるかどうか。出てくれたとしても、春雄の願いを聞いてくれるかどうか。怪しいが、一縷の望みに賭けるとしかないのである）

相手が電話に出た。

「ご無沙汰していた。春雄である。貴方に折り入って話がある。かなり緊急でなおかつ重要な案件である。貴方も関心大のはずの話題

だ
」

「リアル図書館戦争って呼称、おかしくねえか？」という記事が、近藤の精神に火をつけた。近藤の内面は今、静かな炎が燃えたぎっていた。

第三章 ロリコンニート、莓ましまろ鑑賞を中止し、東京都との戦いを決意する

「いつ見ても莓ましまろは素晴らしい。最高のロリアニメと言っている」

箕輪晴子は『莓ましまろ』のDVDを見ながら呟いた。『莓ましまろ』は女子小学生の日常を描いたテレビアニメだが、箕輪はロリコン向けアニメと理解していた。

箕輪晴子、無職、二十歳。高校卒業後、進学もせず、かといってバイトもせず、家でロリアニメ三昧・ロリ漫画三昧・ロリゲーム三昧を送っているロリコン廃人である。

「茉莉かわいいよ茉莉。眼鏡っ子という点で、さらに可愛さ倍増してる。私ときめいちゃうよ。抱きしめたい。茉莉の抱き枕ないのかなあ。あったら絶対買うのに」

茉莉とは『莓ましまろ』に登場する桜木茉莉というキャラクターのことで、小学五年生である。眼鏡をかけている。

突然、箕輪の携帯が鳴った。

「何だよ。今莓ましまろ見てんだよ。どこの馬鹿だ？」

箕輪はDVDを一時停止にし、携帯電話の画面を見つめた。「近藤春雄」という文字が目に入ってきた。

「近藤春雄」

箕輪は画面を見たままである。

「って誰だっけ？」

箕輪の記憶に近藤春雄の名前はなかった。

「切っちゃえ」

箕輪は一時停止を解除して、再び『莓ましまろ』を見始めた。

「わあ。伸恵も可愛いよなあ。もう大人だけだな。私のストライクゾーンではないけど、嫌いじゃない」

再び携帯の着信音が鳴り響いた。

「つたく、今度は誰だよ」

箕輪は苛立ちながらも、携帯電話の画面を見やった。

「また近藤春雄かよ。誰だよこいつ。あー、もう直接文句言ってる」

箕輪は電話に出た。

「あー、もしもし。どちらさまでしたっけ？」

——ご無沙汰していた。春雄である。貴方に折り入って話がある。かなり緊急でなおかつ重要な案件である。貴方も関心大のはずの話題だ

「あのー、春雄とか言われても覚えがないんですけどね。私とどう関係ですか？」

——春雄のことを覚えていないだと？ 正気か？

「正気も正気ですよ。ほんとあんた誰ですか？」

——五年前

「はあはあ、五年前」

——ともに児童ポルノ法改悪に立ち向かった戦友ではないか？

「児童ポルノ法改悪？」

箕輪は遠い記憶を遡った。箕輪には思い当たる節があった。箕輪は戦いに明け暮れた日々を思い出していた。今となっては、もはや遠い日の記憶であった。

「あー、思い出しましたわ。近藤春雄さん。いや、近藤先輩」

——思い出してくれたか。ならば、再びともに

「お断りします。もうかけてこないでくださいね」

箕輪はまたしても電話を切った。

「さあて、苺しまろ、苺しまろと」

またまた携帯電話が鳴り始めた。

「何ですかしつこいですねえ。私は忙しいんですよ」

——話を聞いてくれ。

「どうせろくな話じゃないんでしょう？ 五年前は散々な目に遭いましたよ」

——これは日本の、世界の漫画愛好家にとって由々しき事態なのだ。今、東京都が青少年健全育成条例改正を推し進めている。もしこれが改正されたら、東京中から芸術的漫画の数々が不健全指定図書とされ、姿を消してしまうのだ。これはひとりの芸術愛好家として、断固として阻止しなければならないと春雄は思うのである。箕輪君、貴方も是非私に力を貸して欲しい。あのときのように。

「また殴りこみをかけるわけですか。今度は東京都庁ですか。はい、それはけっこうな芸術愛好家魂ですね。しかし、考えるまでもなく、かたくお断りします。五年前は私もまだ中三で血の気が多く、何より若かったですからね。先輩の熱弁に騙されちゃいました。しかしもう私も二十歳。あんな馬鹿は二度とやりませんよ。じゃあ切りますよ。今苺ましまろ見てるんですよ。無茶苦茶忙しいんで。ほんとにもうかけてこないでくださいね。先輩とはもうこっぴりです。さよなら」

——この暴挙がなれば、貴方が愛好しているロリ漫画も消えてしまふのかもしれないのである。それでもいいのか。

「な、な、な、何ですと。ロリ漫画が消える？ そんなことが」

——起こりうるのである。どうだ、春雄と戦う気になったか？

「原石、許すまじ！ 都庁を落としましょう先輩！」

箕輪は拳を握りしめ、原石慎太郎の顔をイメージし、底知れぬ憎悪をみなぎらせていた。

第四章 二人のゼロ

箕輪は新宿区西新宿に立っている東京都庁第一本庁舎の入り口にいた。そこで近藤と待ち合わせをしたのである。

五月とはいえ、もう初夏といってよい季節だった。箕輪はＴシャツにジーンズという服装であった。

「はやくこいよ相撲取り」

近藤は幼稚園・小学校・中学・高校・大学と相撲部に所属していた。相撲の取り組みに萌えと同じものが感じられるというのが近藤が語ってくれた相撲をする理由だったが、箕輪はまったく理解することができなかった。はつきり言って、自分のことを「春雄」と呼ぶ近藤のことを奇人変人とし、箕輪は見えていなかった。

「箕輪君、待たせてすまない」

五分ほど待ちぼうけを食わされてやっと近藤が姿を現した。スラックスに白のワイシャツといういでたちであった。

「ほんとに行くんですか先輩？」

箕輪が露骨に迷惑そうな顔をして聞いた。

「無論である。もはや直接的物理的暴力を行使することしか、この問題を解決する方法はないのである。まず手始めに、原石都知事と瀬猪副知事を誅するのである。トップを失い、改正案推進派は氣勢をそがれるはずである。その隙をつき、世界中に散らばる我々漫

画愛好家が立ちあがり、反対の大論陣を張り、改正案を完璧に粉砕するのである。これが春雄の計画である」

「そんなうまくいくんですかあ？」

箕輪はわざわざ都庁にまでやって来ていながら、未だにふんぎりがつかないでいた。

「いく。否。いかせなければならぬのである。ことの成否は、すべて我々二人の行動にかかっているのである」

「そうは言ってもですねえ。……この曲は」

箕輪と近藤の耳に、突然歌詞が入ってきた。

この胸に抱くのは正義

朱く熱く燃えるわが太陽

「これはA L I P R O J E C Tが歌う『鬼帝の剣』」

箕輪は曲のする方を見た。『鬼帝の剣』はテレビアニメ「鉄のライバル」のオープニングテーマ曲である。

箕輪の目に、テレビアニメ「コードギアス 反逆のルルーシュ」のゼロのコスプレをした人物が飛びこんできた。しかもひとりではなく、二人であった。ひとりは腹の出た人物で、もうひとりは痩身であった。箕輪は瞬時に腹の出た方をデブゼロ、痩せた方を痩せゼロと名付けていた。箕輪はどちらかといえば、細身の男性が好みであった。

「だからお前ついてくんなよ！ 俺はこれから世界の漫画を救う聖戦に行くんだよ！ お前がいたらキャラがぶつちまうだろ！」

デブゼロが痩せゼロに向かって言った。

「奇遇だな。私もこちらの方角に用があるのだ」

「お前の声、すげえ福山に似てんな。お前福山潤じゃねえの？」

「福山潤？ 誰だ？ 我が名はゼロ！ 世界を破壊し、世界を創造する男だ！ 合衆国日本！ これできるか？ 合衆国日本！ と言うとき、微妙にこうやって腰をくねらせるのだ。ふふん、貴殿にできるかな？」

「なめやがって！ こうすりゃいいんだろ！」

デブゼロが盛んに腰をくねらせた。と、突然、痩せゼロが走り出した。

「ふははははははははは！ お前は一生腰をふりふりしてる！ そうこうしているうちに、私は都庁に巣くう原石一派を殲滅してやるのだ！ さらばだ、太ゼロ！」

「どうやら痩せゼロはデブゼロのことを「太ゼロ」と命名したようである。」

「あ、待て！ 汚いぞお前！」

デブゼロも痩せゼロを追って駆けだした。この間も、『鬼帝の剣』は流れ続けていた。

交差する光よ

落ちる影は未来の先を

輝かせるだろう

「先輩、なんか私たち以外にも、原石を倒そうとする人がいるみたいです。どうします？」

「これは、利用しない手はないな。彼らとともに戦うのである。ムツチムチゼロと非ムツチムチゼロとともに」

「ムツチムチ？ 非ムツチムチ？ それどういう命名ですか？ 先輩のセンス、疑いますよ」

二人のゼロは都庁の中へと消えていったのを確認した箕輪もまた、地を蹴っていた。

「ほら先輩、置いてきますよ」

「待て箕輪君、春雄は走るのは苦手なのだ」

近藤もとばとばと箕輪の後を追った。箕輪にはどう見ても近藤が
なりの重量級に思えた。

（人のことムツチムチとか、自分はどんなだよ、先輩。私にはど
つちもどつちだよ）

箕輪は走りながら、デブゼロと近藤のどちらが体重が重いのか、
考えていた。

第五章 はいやあたたたたたほわちゃあちよー！

「ところで、福山さんはどこに行っただ？ トイレから出てきた後、突然出て行ってしまったが」

さっきまで河村がいた坂本邸で真綾——坂本真綾がOD——
小野大輔に訊ねた。

小野は紅茶を片手に、うーんと唸り、

「ね。まさか、河村さんと一緒に都庁に行っちゃったとかはないでしょうか？」

と言った。

「まさかな。それはないだろう」

二人は揃って笑い声を上げた。

「先生、ご命令通り、すべての警備員を一階に配置しました」

原石の秘書が原石に報告した。

「うん。それでいい。御苦労、君は下がっていい」

「は」

「いささか大げさではないですか、都知事」

瀬猪直樹東京都副知事が苦笑いを浮かべていた。

「そうですね。ただか四人組の襲撃者に、全警備員三十人を当たらせるとはにや。少し大がかり過ぎにや」

原石の側近にして、青少年健全育成条例改正案推進派の首都大学東京教授・刑法学者、田前雅英である。

「だけでなく、我々までもここに呼んだのはどういうわけですか、都知事」

警察庁出身の東京都青少年・治安対策本部長、田倉潤が発言した。

都知事室には、他に原石の四人の息子、伸晃・良純・宏高・延啓、俳優の利綿哲也・知多ひろしの姿があった。

皆の視線を集める中、原石が口を開いた。

「今が正念場なんだ。ここで反対派過激派のうすら馬鹿どもを一網打尽にし、反対派のイメージダウンを狙う。連中の攻勢をそぐ絶好の機会というわけだ。警備員だけで事足りると俺も思っている。しかし、万が一ということもある。そのときは、諸君の力を貸してもらいたい」

「そういうことだったにやか。それなら了解だにや」

田前を筆頭に、出席者全員が頷いた。

痩せゼロ・非ムツチムチゼロが都庁に入ったとき、まず目に入ってきたのが警備員であつた。そこは警備員で溢れていた。

（どうということだ？ なぜこんなにも多くの警備員が……）

「なんか警備員の数が異様に多いな。おいどうしたお前、まさかおじけついたんじゃないだろうな？」

遅れて入ってきたデブゼロ・太ゼロ・ムツチムチゼロの河村が痩せゼロを冷やかした。

「馬鹿な。私はこの状況を打開する戦術を練っていたところだ。そういう貴殿には何か打開策でもあるのか？」

「だははははは、策だつて？ ただ攻撃あるのみ！ 強行突破だ！」

河村はラジカセを置き、CDを交換した。

雨がやんでしまつたら どこへ帰ればいい？
きみに逢いたいときは どんなふうに呼べばいい？

河村がかけたのは坂本真綾が歌うテレビアニメ「鉄のラインバレル」エンディングテーマ「雨が降る」であった。

「うおおおおおおおおおおおおおお！ 俺はゼロ！平成世直し救世主仮面ゼロ！ 世界に冠する日本文化の極致・日本漫画を死守するため、東京都が推進する青少年健全育成条例改正案に絶対反対の正義の騎士だ！ 表現の自由を守るという正義のため、原石慎太郎をぶっ倒しに参上した！ 我が行いは正義そのもの！ ゆえに、俺に刃向かう者、これすべて邪悪！ いざ、参る！ 都知事室まで通らせてもらう！」

「不審者が現れるという情報は受けていたが、本当だったとは。君ね、ここは公共の場所だからね、静かにしなさい」

警備員のひとりが河村に注意した。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

警備員の顔に河村の拳が炸裂した。警備員は悲鳴を上げる間もなく床に体を沈めた。

「見たか！ これが一週間の特訓の成果だ！ 「北斗の拳」の第一話の動画をネットで検索して苦労して見つけて早送りして見、「蒼天の拳」第一巻をばらめくって読み、映画『燃えよドラゴン』はほとんど早送りして最後のバトルシーンだけ見、ステイブン・セガールの映画は全く見ずに、グレルルーシュ潤からは柔道を、ODからは三日少林寺拳法を、真綾からは二十分ひとりチャンバラを伝授された俺は、その天才的能力をさらに引き出され、今や最強の

戦士と化したのだ！ 俺こそがウルトラスーパーゼロだ！ そしてこの掛け声！ 元来からのはいやあ！に、あたたたた！とほわちやあー！とあちよー！を融合したはいやあたたたたたほわちやあちよー！ これこそが最強の戦士に相応しい、最強の掛け声なのだ！」

河村が力説している間に、総勢三十人にもなる警備員が河村と瘦せゼロの近くに集結していた。しかし、河村は力説するあまり、気がつかないでいた。

今、東京リアル図書館戦争の火ぶたが切って落とされたのであった。東京都庁は輪美明宏事件以来、二度目の戦火に見舞われることとなったのである。

第六章 ネットの伝説、四銃士

「大人しくしろ！」

警備員が河村を取り押さえようと、河村の左肩を押さえた。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村が体をよじり、右手で警備員の頬を殴打する。警備員が二メートルほど吹き飛んだ。

「こいつ！」

警備員が警棒を手に、河村に殴りかかってきた。河村の腹の突き出た体が舞った。河村の回し蹴りは正確に警備員の後頭部に入った。

「じぶっ！」

警備員が床に転がった。

「どうしたもう一人のゼロ！　ここは俺一人で全部倒しまうぞ！　それでもいいのか！」

「私は貴殿とは違って頭脳派でね。肉体労働は好まない」

痩せゼロは肩をすくませて見せた。その左腕をがしと警備員が掴んだ。

「お前も仲間か！」

「私に触れるな！ 粗忽者め！ とおあつ！」

警備員が宙を泳ぎ、床に叩きつけられた。痩せゼロが投げ技を披露したたであつた。

「数えてみたが、三十人いる。二人で倒すとなると、ひとり十五人か。きついな」

「違いますよ」

「二人ではないのである。我々も加勢するのである」

「む？」

箕輪と近藤が登場した。箕輪は背負っている竹刀袋から竹刀を取り出した。近藤が相撲を幼い頃よりやっていたように、箕輪は剣道を嗜んでいた。

「四人か。これならやれるかもしれんな。とおっ！」

痩せゼロは警棒を手に向かってきた警備員をまたも投げた。一本背負いであつた。床に激突した警備員の腹を力の限り踏みつけた。

雨が降る 虹を待つ きみの空へ連れ出して
雨が降る 終わらない夢の外へ連れ出して
ずっと探してた景色 たったひとつの奇跡

ねえこんなふうに きみがわたしを変えていく

「どすこいてある！」

近藤が突進しながら得意の張り手を警備員の顔面に食らわした。警備員はその場に崩れ落ちた。二人目、三人目と、近藤は次々に張り手で警備員をのしていく。

箕輪は竹刀で警備員と渡り合っていた。警棒を受け止め、警備員の額を打ちすえ、喉を突く。警備員は昏倒した。

「これで八人か。みな、背中あわせに輪を作れ！ バラバラで戦っているとなますにされる！ 固まって戦うのだ！」

瘦せゼロの指令に従い、四人が背中あわせになり、警備員と対峙した。さらに警備員がそれを取り囲む。

河村は珍妙な奇声をあげて警備員を殴り蹴り、瘦せゼロは投げ技を繰り出し、近藤は張り手をお見舞いし、箕輪は竹刀を振り回した。誰かが突出しすぎると瘦せゼロが命令を出し、輪に戻らせた。

四人の中でも特筆するべきなのは、近藤の働きであった。近藤は矢継ぎ早に繰り出す張り手で、幾人もの警備員を屠っていた。張り手ばかりでなく、ときには警備員の腕をとって引っ張り、他の警備員に、つけさせたりもした。

四人、八人、十二人、十六人と警備員は床に転倒していった。

「何たることだ！」

原石慎太郎は予想だにしない事態に驚いていた。都知事室にはテレビが置いてあり、その画面には一階の河村たち四人と警備員の戦いの模様が中継されていた。

「漫画が危機に瀕するとき、二人の仮面の男、ひとりの力士、ひとりの剣士が現れ。彼ら四銃士は悪を滅ぼし、その危機を救うであろう」

瀬猪が呟いた。

「何だそれは？」

原石が瀬猪を見て言った。

「ネットで広まっている伝説です」

「こいつらが四銃士だと言うのか？ 俺は悪者か？ 馬鹿馬鹿しい。そんなことがあるわけ」

「なぜそう言いきれる？」

原石の発言を途中で遮り、サタンが口をはさんだ。

「俺はそう簡単にやられるわけにはいかん。東京の命運は、俺が握

っているのだからな」

原石は画面越しから四人を睨みつけた。

「とても敵わない。逃げろ！」

まだ立っていた警備員たちが四人に恐れをなして脱兎のごとく逃げ出して行った。

「どうやら我々の勝ちらしいな」

痩せゼロが両手を払いながら言った。

「当たり前だぜ！ 正義は必ず勝つもんだ！ いえーい！」

河村がひとりだけガッツポーズをとった。三人はそれをあきれ顔で眺めていた。

現実を 想像を超えて きみと飛んでいく
限界を 境界を超えて きみと飛んでいく
ずっと探してた景色 たったひとつの奇跡
ねえこんなふうに きみがすべてを変えていく

第七章 廃人無職青年工作員疑惑

警備員との戦いののち、河村たちは休憩とばかりに談笑をしていた。

「そうか。お前らも条例改正案に反対してやって来たんだな」

「箕輪晴子です、よろしく願いします」

箕輪がぺこりと頭を下げた。

「ゼロだ。宜しく。この太ったのはまあ、私の前座といったところかな」

痩せゼロが河村を指差して言った。

「何が太ったのはだ！俺もゼロだ、よろしくな」

箕輪は困惑気味の顔を見せた。

「えっと、太めのゼロさんですね」

「太め！」

あぜんとする河村であった。

「春雄である。宜しくお願いするのである。この改正案の成立を許せば、芸術的シヨタ漫画の数々が消え去ってしまうのである。座して死を待つ春雄ではない」

デブゼロ・太ゼロ・ムツチムチゼロこと河村は、本名河村英樹、二十四歳無職。つい一週間前に某漫画のアニメ化に怒りを覚え、暴行事件を起こしたばかりの男であった。今回の都庁襲撃も、改正案に危機感を感じてのことであった。

「しかし、春雄さんよ、だからってここまでやるか普通。俺が言うのも何だが、これは犯罪だ。逮捕されて人生終わるかもしれないぞ?」

「うむ。春雄もこの間までメールやブログを使った反対活動を展開していたのである。しかし、今日あるブログの記事を読み、考えを改めたのである」

「あるブログ? なんてブログだ? どのような内容の記事だ?」

「『廃人ニートは小説を書けるか?』というブログである」

「何! そこは廃人無職青年というニートがやっているブログだろ。そこなら俺も知ってるぜ」

「知っていたか。春雄はその男が原石の手の者に思えて仕方がないのである」

「はあ? 手の者? 何言ってるんだあんた」

「おそらく、反対派のやる気を喪失させる目的で記事を書いていたに違いないのである。その記事を読んで現に春雄は強いショックを受け、やる気がなくなってしまったのである。そしてネットの反対活動に見切りをつけ……。ハッ!」

近藤の顔が驚愕で占められた。

「どうしたんだ、春雄さん？」

「しまったのである！ これはおそらく、廃人無職青年が張った罠！ 奴はネットの反対運動の意欲を失わせ、我々の行動を現実社会に向けさせ、過激な反対派に変貌させ、事件を起こさせる計算だったに違いないのである！ 我々ははめられたのである！ 春雄ともあろう者が、まさかこんな手に乗せられるとは！」

近藤の顔が苦渋に満ちた。

「待てよ春雄さん、廃人無職さんはそんな人じゃないって。いや、よくは知らないけどさ」

河村がよく知りもしないのに廃人無職青年を擁護したが、近藤の顔が晴れることはなかった。

「だからあ、いつになったら報酬は頂けるんですか、世耕先生」

廃人無職青年——谷垣直人は自宅で電話で会話中であつた。

「今月分はもう渡したはずだがね、直人君。それに君のブログは青少年健全育成条例改正案に関する記事が少ないんじゃないかな？ こちらとしては、もっと書いてもらわないと困るね」

谷垣が話しているのは、民自党参議院議員・世耕成弘である。「

民自党のゲッベルス」の異名をとる、民自党の広報戦略・IT戦略のプロフェッショナルだ。

「そうは仰いますけど世耕先生、私のブログは毎日三百前後のアクセスがあるんですよ。三百ですよ三百。一週間だと二千百。これは、山本太一先生のブログと同じくらいのアクセスがあるってことなんです。私のブログはそれだけ影響力があるブログなんです。それをわかって仰ってるんでか、世耕先生」

「何度も言っけど、もう今月分は支払った。これ以上払うつもりはない」

「いいんですか。親父に言いつけますよ」

「言いたければ言えればいいさ。お父上も私と同意見のはずだからね。じゃ、もう切るよ」

「まったく、がめつい奴だ」

電話を切った世耕はひとり毒ついた。

「あの井桜誠似のデブ男が！」

谷垣は叩きつけるように受話器を置いた。井桜誠とは、保守系市

民団体「在日特権を許すまじ市民の会」会長で、眼鏡をかけた肥満体であった。世耕も眼鏡をかけており小太りで、谷垣は影では世耕と井桜を双子と言っていた。

谷垣直人は民自党総裁・谷垣一禎の息子であった。しかし、ハンドルネームが示す通り、ニートで、働きもせず毎日を無為に過ごしていた。

谷垣は高校生のときパソコンを買ってもらって以来、世耕のネット工作機関「チーム世耕」の一員として働いていた。そこそこの小遣いが月々支払われるのが魅力であった。世耕によると、民自党のネット工作員は谷垣のように身内に民自党関係者がいる者が多いらしい。

近藤が喝破したように、廃人無職青年こと谷垣直人は改正案賛成派の工作員であったのである。

第八章 原石慎太郎の理由

「よし、そろそろ行くぞ」

河村がエレベーターに向かって走り出した。他の三人も後を追う。

「いよいよ都知事と対決ですかあ。なんかドキドキしますね」

エレベーターの前で箕輪が興奮気味に言った。

「春雄の張り手を老害・原石の顔に食らわしてやるのである。年寄りといえども、表現の自由を侵す悪人には、容赦はしないのである」

近藤が決然と思いを述べた。

「どうでもいいけどさ、春雄さん、その「である」っての何とかなんねえの？　なんか聞いていると、イラついてくるんだが」

「これは春雄の口癖である。今更直せないのである」

「あ、そ。……。おせえな。エレベーターまだかよ」

「いくら待っても来ないよ。俺が止めたからな」

突如、原石慎太郎の声が響き渡った。

「原石！　監視カメラから見ているのか！」

河村が辺りを睥睨する。スピーカーがないか探したが、見つから

なかった。

「まあそんなところだ、四人組諸君。いや、ここは四銃士殿と言っておくべきかな？」

「四銃士だと？ 何のことだ！」

「ここまでやつおいて、しらばつくれることはないだろ。大方、自分たちで噂を流しておいたんだろうが、無駄なことをしたな。警察には通報しておいた。じきに警察が来て、お前らはお縄となる」

「そうはさせるかよ！ 今から知事室にまで行ってやらあ！ 俺たちの漫画愛好家魂をなめるなよ！」

「漫画愛好家魂？ ちゃんちゃらおかしい。笑わせるな。お前らはただの変態に過ぎんのだ。どうせ風俗に行けない臆病者の集まりだろ？ 風俗の代わりに、すけべな漫画買って読んでマスかいてるだけのおこちゃまじゃないのか？ 日本の男もだらしくなったもんだな。だから、俺たち老人が奮起して日本を今一度立ち上がらせるしかないのさ。そして俺は都知事だ。東京を守るのが俺の仕事だ。変態すけべ漫画は然るべく規制して、子供たちを有害漫画から守るのだ。その何が悪い？ お前らはオカズがなくなったら困るもんだから、ただ闇雲に反対してるだけじゃないのか？ やれ表現規制反対だの、やれ表現の自由を守れだの、大層なお題目を言っているが、事の本質はすけべ根性に他ならない。お前らに大義はない。ただすけべなだけだ。違うか？」

「よくもまあ、ぺらぺらと口走りやがってこの糞ジジイ！ よく聞け老害！ エロ漫画が子供に悪影響を与えるって言うんなら、その証拠を示せてんだよ！ お前の話は、科学的根拠が欠如してるん

だ！ 全部お前の思い込み、妄想、偏見に過ぎないんだよ！」

河村が猛然と反論した。

「根拠？ お前ら青二才はすぐそれだ。根拠、根拠とうるさくてかなわんな。しかし、仮面のニイチヤン、よく聞きな。この世の中は、そんなにあっさりと証拠が示せるほどうまくできてないんだ。ただ、有害漫画が子供を犯罪へと導くと言う人はいるってことだ。漫画だけじゃない、アニメやゲームもそうだ。少なくとも俺は、それらの所為で、少年犯罪の低年齢化・凶悪化が起きたと思っている。そして、俺を支持している都民は多い。よって俺は正しい」

「アホらし。話にならねえ！ 首を洗って待つてろってんだ！」

「なかなか生きのいい男だな、仮面の。しかし、ここまで来れるかな？ 俺は七階にいるぜ。来たけりゃ、さっさと来な」

「みんな、階段で行くぞ。なに、七階なんてすぐだよ」

四人は階段を急いだ。しかし、大勢の人間が階段を降りてくる足音が聞こえてきた。

「誰か来るのである。それも、一人や二人ではないのである。相当な大人数と推定されるのである」

「だからそれなんとかしろよ！」

階段を上ろうとした四人の前に、スーツ姿の一団が現れた。それぞれ

「我々は民自党都議団四十九士である！ 過激反対派を討伐せよとの原石都知事のご命令を受けた！ どあああああああ！」

先頭の男が河村に斬りつけてきた。河村は右へよけ、まず刀を振り下ろしてがらあきの男の脇腹に拳を入れた。続けざまにすかさず第二撃を繰り出し、今度は後頭部を殴りつける。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

掛け声も忘れない。

「ぐふっ！」

男が階段に昏倒した。

「ここは狭い！ 元居た場所にこいつらを誘導し、そこで戦おう！」

瘦せゼロの言に従い、四人は階段から離れ、警備員が気絶している場所へと戻っていった。

「さすがに四対四十九では勝ち目はあるまい」

原石は画面を見ながらほくそ笑んだ。

第九章 非モテスリムゼロ

河村は急いでラジカセを床に置き、リュックサックから一枚のCDを取り出してセットした。

YouはShock 愛で空が落ちてくる
YouはShock 俺の胸に落ちてくる
熱い心 クサリでつないでも 今は無駄だよ
邪魔する奴は 指先ひとつでダウンさ

河村がかけたのはテレビアニメ『北斗の拳』のオープニングテーマ「愛をとりもどせ!!」であった。

「うおおおおおおおおお！ この歌を聞いたら、力が！ 力が沸いてきたぜ！ おおおおおおおお！」

河村は民自党都議団に向かっていった。

「おい太いの、ひとりで突っ込むな！ 集中砲火を浴びるぞ！」

痩せゼロの必死の忠告も、河村の耳には届かない。

「はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

ひとりの都議の顔に河村の拳が埋まり、都議が地を這った。

「くそ！ 太いのを援護するぞ！」

「了解です！」

「委細承知である」

痩せゼロの指揮のもと、三人は河村の周囲を陣取った。

「俺は一週間、この日のためにみっちり特訓を受けたんだ！ ほとんどアニメの話ばかりで、あまり興味もない制作現場の話聞かされていただけだったが。お前らみたいに、都議会で毎日不毛な議論に終始したり、役人や企業経営者と飲み食いして過ごしている連中は、体の出来が違うんだ！」

河村が威勢よく都議に弁をうつ。

「主民党の破壊工作員どもが！ 我々民自党は主民党を憎むこと、地球の如し！ 恨み骨髓に達しているのだ！ それは中国・韓国・北朝鮮・反日左翼どもが日本を憎む如しだ！」

「俺は主民党支持者じゃねえ！ 自分探しの旅に従事する旅人、そして芸術を愛する正義漢だ！」

都議が刀を一閃させる。河村は一步後退しいそれをかわし、地を蹴り、腹を蹴る。都議が床に昏倒する。

「非モテスリムゼロは違うかもしれないが、今のところ春雄は主民

党支持者である。漫画を守るため、致し方なく主民党を支持しているである」

春雄が都議のベルトを掴み、壁へ放り投げながら言う。

「非モテスリムゼロ!? なんじゃそりゃあ!？」

「違うのか? てっきりそうだと推理したが?」

（非モテスリムゼロ。言いえて妙かも。いや、的確な表現です、近藤先輩。しかし、それを言うなら先輩はどうなるのかと私は思うのですが）

近藤と河村のやりとりを聞いて、箕輪は笑いをかみ殺していた。

爆笑したくしょうがなかったが、それでは緊張の糸がほどけてしまふ。今は戦いするとき。そう思い、堪える箕輪であった。

「確かに俺は彼女いない歴二十四年だが。これからはそこはあまり言ってくれるな春雄さん。わかったか?」

「うむ。約束である」

（非モテは本当だったんだ。しかも彼女いない歴二十四年とか。この体型ではしょうがないかも）

もはや箕輪は堪えなくなり、満面の笑みを浮かべてしまっていた。その隙を民自党都議団は見逃さなかった。

「何を笑っている!」

箕輪の背後から都議が刀を振り下ろした。

「箕輪君、危ないのである！」

近藤が声を張り上げた。

「え？」

箕輪が間拔けた声を出した。

「！」

次の瞬間、都議の刀は空を斬っていた。箕輪が寸前で左に体を移動させていたからである。

「私をあんまりなめてもらっては困りますね。いくらニートとはいえ、幼稚園から高校まで、十数年間も竹刀握っていた私ですよ。敵に背後をとられたくらい、わからなくてどうしますか？ 人に背中から斬りかかるなんて、究極の卑怯じゃないですか。そういう人にはね、こうさせてもらいますよ！」

箕輪の竹刀が都議の肛門を直撃した。

「ひいやあ！」

都議が悲鳴を上げ、刀を手から落として、床に転がり、悶絶した。

「箕輪君、えげつないことをするのである」

「何言ってますか先輩、今は命のやり取りしてるわけで、このく

らいのこと、当たり前だのクレッカーですよ」

箕輪が白い歯を見せて近藤に笑いかけた。

「古いのである。そしてつまらないのである。もう言っただけである」

近藤が渋い顔をして言った。

第十章 潤パワー炸裂

「倒したのはやっと五人。まだまだいるぞ」

瘦せゼロが三人に告げた。

「我ら民自党都議団四十九士、ここで息果てようとも、貴様ら主民党の刺客を返り討ちにしてくれる！」

都議団は四人を取り囲んだ。すぐには斬りかかってこない。じりじりとなぶり殺しにするつものようだ。

「太、福山潤のCDはないのか！」

「そんなもんあったけ？ 待ってろ、今探す」

河村がリュックサックに手をつ込み、漁り始めた。

「主民党、死ね！」

都議のひとりが河村に襲いかかった。

「させるかっての！」

箕輪が刀を受け止めた。

「今です、近藤先輩！」

「どすこいである！」

近藤が都議の顔に張り手を十発連続で放った。都議は気を失って倒れた。

「あつたぞ！　と言っても、ルルーシュのキャラソンだけだな」

「いいからかけろ！」

河村がCDをセットする。

never end　たとえ夢が叶おうとも
never end　笑顔見せることはないだろう

福山潤が歌う「never end」が流れた。

「おおおおおおおおおお！　これだ！　これを待っていた！」

瘦せゼロが腰にさした剣を引き抜き、都議に向かって走り出す。
一人目は首を斬り、二人目は頭を打ち、三人目は左側頭部を薙いだ。

廻れ廻れ運命の螺旋よ　その先に答えが待つなら
西へ東へ北へ南へ　この脚で大地を刻もう

四人目は右肩を打ちすえ、五人目は喉を突き、六人目は胴を抜いた。七人目は胸を突き、八人目は両手首を打ち、九人目は股間を逆袈裟がけに斬り、十人目はまた頭を打った。

瘦せゼロは瞬間に十人を打ち倒したのだった。合わせて十六人の民自党都議が床に転がる事態となった。

「お前凄いな。どうなってんだ？」

河村が素直に驚嘆の声を上げた。

「これこそが潤パワーだ！」

「潤パワー？」

「福山潤の歌声を聴くだけで、底知れぬ力が沸きあがってくるということだ。……見せかけの愛や夢に抱かれ　どこへゆこうとしている？　心の亡骸が叫ぶだろう　未来はそこに無いと……」

「狙いを定めて刀を投げろ！　こいつらを突き殺すのだ！」

民自党都議団のひとりが言った。いつせいに都議団が刀を投げよ

うと、刀の柄を右手にもった。

河村も腰の剣を抜刀し、身構えた。痩せゼロも箕輪も飛んでくる刀を剣と竹刀で叩き落す腹積もりであった。

「来るぞ！ 攻撃に備えろ！ 春雄君、貴殿は私たち三人の中へ入れ！」

「お断りである。春雄は人に守られるような、そんな軟弱な男ではないのである。戦いは先手必勝、先んじたものが勝つのである！」

近藤は駆けだした。

「春雄君、危険だ！ 戻るんだ！」

都議団の数人が刀を近藤に向けて投げた。近藤は縦横無尽に左右を駆け、刀をよける。刀が虚しく床にぶつかっていく。

「春雄流相撲術の集大成を見るのである！」

近藤は都議のひとりの腰を掴み、持ち上げた。

「どすこいである！」

他の都議に向かって投げた。

「うわあああああ！」

都議たちが悲鳴を出して逃げ惑う。

四銃士相手に苦戦する民自党都議団の様子を携帯電話の画面から見ていた男があった。

「チツ。たった四人相手に何やってんだか。かつこ悪い醜態晒してくれるぜ。これも民自党の末期症状がなせるわざってか？　ここで待ってるって話だったが、これじゃあ、そうも言ってるんねえ。ここは俺が出るしかないな」

男は四銃士と民自党都議団がいる一階を目指し、階段を降りて行った。

第十一章 筋肉質男の乱入

「ところで都知事、警察へはいつ通報されたので？」

瀬猪が原石に聞いた。

「通報？ してないよ」

「何ですって？」

「通報したらあいつらはすぐに捕まっちまうだろ？ 都庁に殴りこみをかけ、俺の命を狙ってきた連中だ、そうやすやすと警察の手に渡してなるものか。警備員や都議団にふるぼっこにしてもらってから、警察に引き渡す予定だった。警備員がやられて、少し番狂わせになったが、じきに奴らは力尽きるだろう」

「水を差して悪いが、原石よ、お前の目論みは既に綻びを生じ始めているようだ」

「何だと？ どういう意味だ、サタン？」

「今にわかる」

「囲んで斬り殺せ！」

都議のひとりが叫ぶ。

「囲まれるな！ さつきと同じように輪を作り、各自広げたり狭めたりして確実に敵を仕留めろ！」

痩せゼロの檄が飛ぶ。

「それから非モテスリムゼロ、貴殿は新しいCDをセットしろ！
今すぐだ！」

「了解！」

留まる者 愚かなりし

はらりひらり指に触れた

黒い翼の 一片

ALI PROJECTが歌うテレビアニメ「戦う司書 The
Book of Bantorra」のオープニングテーマ「墮
天國宣戦」が流れだした。

「ALI PROパワーである！」

春雄が都議の斬撃を右に避け、素早く張り手を都議の後頭部に叩きこむ。都議はその場に崩れ落ちた。

「ALI PROっていいですね。なんかっこいいっていうか」
箕輪が都議の面を打ち、体当たりし、鰐で都議の鼻のあたりを殴った。都議は昏倒した。

「ALI PROは俺も好きだあ！ 痺れるぜ！ はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

河村が今まさに刀を振り下ろそうとする都議の顔に拳を放つ。拳は吸い込まれ、都議は気絶した。

抗え のたち幾度破れど
刻もう 纏った傷跡に夢を
埋もれそうな今日の記憶
繋げるために 明日へ

「これで二十人！ 残りは二十九人だ！」

瘦せゼロが声を張り上げ、仲間知らせた。

「二十九人！ マジかよ！ そんなに戦えるわけねえぜ？ これはいったん撤退して体制を立て直すのがいいかもな」

「弱気になったらその時点で負けなのである！ もはや、常に敵を倒し続けるしかないのである！」

「ほほう、あんた元気があるじゃないか、眼鏡君」

階段からスーツにネクタイという服装の男が降りてきた。よく日に焼けている。

「お前は、仁大田厚！」

「そうさ。元民自党参議院議員にして元プロレスラーの仁大田厚、それが俺の名だ」

「仁大田さん、あなたは二階で待機していなければならないはずだ。ここは我々の領分ですぞ」

都議のひとりが仁大田につかつかと詰め寄り、詰問を浴びせた。

さっと仁大田の腕が動いた。仁大田の拳が都議の顔に埋まっていた。声もなく都議は前のめりに倒れた。

都議の中にどよめきが走った。

「仁大田さん、何を！ 我々は仲間のはずです！」

「我々？ 仲間？ あんたたちが四人相手に無様な醜態晒して手こずっているから、こうして俺が降りてきたやつたんだろ。もうあんたはいい。家に帰って予定調和のつまらんテレビでも見て糞して寝てろ。政治家といっても、所詮は地方議員。国政に参画していた俺様の露払いにもならないな。雑魚はさっさと俺の前から消えな。こいつらは俺が始末する。さあさあ、散った散った、帰った帰った」

仁大田がしっしつと手を動かした。

「貴様！ 後から来た癖に、言わせておけば！」

都議のひとりが仁大田に斬りかかった。仁大田は素早い動作でス
ーツを脱ぎ、ネクタイを外し、ワイシャツを脱ぎ捨て、上半身裸と
なった。見事な筋肉質の裸体であった。

「どりゃあああああああ！」

仁大田は飛翔し、都議の胸に飛び蹴りを見舞った。都議は三メー
トルほど吹き飛ばされ、床に転がった。

四銃士たちはその様子を啞然と眺めていた。河村が呟いた。

「これで残り二十七人。二人も減ってラッキー」

第十二章 三文熱血青春ドラマ、るろつに剣心、剣道二段、規制アニメ

「仁大田さん、今は仲間割れをしている場合ではないでしょう。ここは一致団結、力を合わせて主民党の暗殺部隊を完膚なきまでに叩き潰すべきときです。そうは思われませんか？」

都議のひとりが滔々と仁大田を説得にかかった。仁大田がその都議に近寄り、力強く手を握った。

「おっしゃるとおりです！ 俺は功を焦るあまり、自分を見失っていた！ 俺が間違っていた！ 今この瞬間より俺たちは同志！ こいつらをぶちのめしましょう！」

「おお！ わかってくださいましたか！」

「なわけねえだろ」

都議は仁大田に顔を蹴られ、背中から倒れた。

「そんな三文熱血青春ドラマみたいな展開、あるわけねえって」

「おのれ！」

都議たちが仁大田を取り囲む。

「今のうちに、二階に行っちゃいましょうよ」

箕輪が提案した。

「そうだな。では、階段へ急げ！」

痩せゼロが指令を下す。四人は階段へと走り出した。

「そうはさせるか！」

十人ほどの都議が四銃士の行く手を阻んだ。

「非モテ、CDだ！」

「たまにはお前がかけろよ」

「何！ 私は指揮官だ。そんなことをしている暇はない」

「ほら」

河村は痩せゼロにラジカセとCDの入ったリュックを押しつけた。

「ふざけた真似を。こうなったら、適当に選んでやる。ええい、これだ！」

痩せゼロはリュックサックの中から一枚CDを取り出し、ラジカセにセットした。

冬の薔花咲く頃

空の色は銀に輝く

大気は奮え風は花弁を

羽根のように吹き散らす

「この曲は？」

都議と斬り結びながら、痩せゼロが河村に聞いた。

「『聖痕のクエイサー』のオープニング「Baptize」だ。それよりみんな、俺の剣の腕前を見てくれ！ 真綾直伝、二十分ひとりチャンバラの妙技が冴えわたるぜ！ これも一週間の特訓の一つだ。あまり聞けない収録現場の雰囲気を教わったぜ」

河村の剣は都議の頭を打った。都議が床に倒れ落ちた。

「それならば、私の方が上だな。なんせ私は『るろくに剣心』を全巻読破、テレビアニメも全話見、OVAも見たくちだからな」

「るろ剣マニアか。恐るべき男だな、お前は」

河村が心底畏怖するかのようにつた。

「るろ剣なんて漫画・アニメじゃないですか。しっかりしてくださいよお二人」

箕輪が痩せゼロと河村の会話に入ってきた。箕輪は逆袈裟切りで

都議の顎を斬りあげ、さらに面を打った。都議は昏倒した。

「そういう貴殿はどうなのだ、箕輪さん。何か剣に関して特段優れたところでも？」

瘦せゼロが箕輪に聞いてきた。

「さっき言っただじゃないですか。聞いてなかったんですか。剣道は幼稚園から高校までやってましたよ。段位は二段までもってます」

「おお。お前なんか地味に凄いな」

河村が都議の刀を受け止めながら言った。

「地味とか。ちょっと酷いんですけど非モテゼロさん。それ、けっこう昔から皆に言われてたんですよ。そのたびにム力ついて。ム力つくよなほんと。面！突き！」

箕輪に面を打たれ、喉を突かれて都議が床に転倒した。

「ほんとときりないですよこれ。まだ何人もいますよ」

箕輪が眉を寄せて言う。

「地道に倒していくしかないのである。急がないと警察が来るのである」

近藤が刀を振り下ろして来た都議の腕を両手で掴み、左手で力いっぱい握り、右の張り手で都議の頬を張る。都議は後ろへ倒れた。

生に縋り赦しを乞い

天の遣わす恵みの露

全て飲み干す慈悲か悪意か

墮落した思考のまま

「うりゃあああああああ！」

仁大田が気絶していた都議の両足を持ち、振り回した。仁大田の周囲にいた都議がいつぺんに五人巻き込まれ、床に転がることとなった。

「これであと十七人か。もうひと踏ん張りだ、みんな！」

瘦せゼロが三人に伝えた。

「この曲、最初が壮大そうな感じがするんだよな。でもさ、アニメは規制されまくってるらしいぜ。授乳アニメという話だったのに、そのシーンはいつも顔がアップされるだけらしい。あと、あえぎ声とかも規制らしい。これも青少年健全育成条例改正案の所為なのか？」

無視して河村が言った。

「こら、人の話を聞け！ 誰が聖痕のクエイサーの話をしろと言った。それにやけに詳しいな。どういうことだ？」

瘦せゼロが河村を叱りつけた。しかし、その問いに河村が答えることはなかった。

（こいつ、授乳シーンが見たかっただけなのでは？ もしや、都庁を襲撃しているのも、その腹いせか？ まさかな）

瘦せゼロは河村に対する疑念を抱いたのであった。

第十三章 再チャレンジ男の乱入

「こうして、仁大田厚の出現により、事態は風雲急を告げ、東京都庁初夏の陣は春雄軍団、都議団、仁大田の三つ巴の様相を呈し始めたのである。勝利を手にするのは、いったい誰なのか？ 春雄軍団は条例改正案を阻止し、漫画を守り切ることができるのか？」

近藤が周囲に鋭い眼光を放ちながら、呟いた。

「何暢気に状況解説を語ってくれてるんですか？ 春雄軍団とかひとりで勝手に名前決めないで下さいね。普通にださいし、センスないです。先輩、バトルの真っ最中ですよ？ ほら、先輩もバトってください！」

都議を相手にしながら箕輪が近藤に促した。

「春雄は今小休止中である。この場合は諸君で何とかしのいでもらいたいのである」

「何勝手に休んでんですか？」

「春雄は汗っかきなのである。春雄は暑くなると、気力も萎え気味となり、体の動きも鈍くなりがちなのである」

近藤はズボンのポケットからハンカチを取り出し、額に浮き出た汗をぬぐった。

「誰が先輩の体質とか聞きましたか？ そんなのいいから戦って下さいよ」

「ううむ。箕輪君、君は春雄に文句を言い過ぎなのである。春雄は先輩なのだから、もっと自重して欲しいのである」

「そう言われても、別に先輩は中学・高校の先輩でもないですからね。年上なので一応、先輩と言ってるだけなんです」

「あー、なんか曲終わっちゃったわ。次何かける？　なんかリクエストある？」

河村がリュックサックに手をつ込んで三人に聞いた。

「いや、特にない」

三人がほぼ同時に答えた。

「あそ。じゃまたてきとーに決めとくわ」

河村はリュックサックをまさぐり始めた。

「次に床に転がりたい奴は誰だ？」

仁大田が都議を前にして言った。

「くそ！　こんなはずでは。今頃は主民党の刺客を袋叩きにし、意気揚々と胸を張って都知事に報告していたはずだったのに。どうしてこんなことに」

ひとりの都議が悔しそうに唇を噛んだ。

「お前らがだらしないからだろ？」

突如、仁大田が大きく右へ体を動かした。仁大田が立っていた場所に鉄球が飛来した。それはテニスボール大の鉄球であった。

「何しやがる！ なにもんだ！」

仁大田が背後を振り返る。

「太蔵！」

「仁大田先生、なかなか反射神経がよいですね。元プロレスラーは伊達じゃないですね」

スーツにネクタイ姿の元民自党衆議院議員・村杉太蔵がラケットを持って立っていた。村杉の傍にはボール入れに鉄球が山積みされていた。

「村杉先生、我々を助けにきてくださっただけですね！」

都議が喜びの声を上げた。

「ちょっと仁大田先生を回収しに来ました。もちろん民自党都議団の皆さんのことは」

村杉が鉄球を手にとり、ラケットで打つ。鉄球が村杉と話していた都議の顔面を直撃した。都議は背中から崩れ落ちた。

「お、これで残りは十六人だな。ラッキー」

そう言うってから、河村は視線をリュックサックに戻し、再びまさがった。

「なんかこれだ！というのが来ないわ。しばらく曲なしで戦つていて」

河村は三人に告げた。

「ついでに倒しに来ました。僕も役に立たない無能無力な人間は嫌いですから」

「村杉！ あんたもか！」

都議の間に再び動揺が走った。

「それに僕はもう民自党とは関わりない身。今は『立ち上がるんだ日本』の一員ですから。ここににいるのも、立ち上がるんだ日本つながりで原石都知事個人の要望に応えるため」

村杉は七月の参議院選挙で沼平起夫と謝与野馨が共同代表を務める新党「立ち上がるんだ日本」から比例代表で出馬することになっ

ていた。原石は立ちあがるんだ日本の応援団長を自認していた。

「僕はもう昔の太蔵ではありません。僕はあの輪美明宏事件では本当に非力なまぬけでした。悔しくて仕方なかった。僕はその思いをばねにして、今日までトレーニングを重ねてきました。得意のテニスを生かすことにしたんです。テニスは大阪国民体育大会 で国体男子ダブルス優勝してますから。無能無力な民自党都議団、仁大田さん、襲撃者四人まとめて倒して差し上げます。さあああああああああああああ！」

村杉がボール入れから鉄球を取り、ラケットを振った。

第十四章 筋肉対再チャレンジ

村杉がラケットで打った鉄球が正確に都議の眉間を貫いた。都議が前のめりになって崩れ落ちる。

村杉は攻撃の手を緩めない。次々とラケットから鉄球が放たれ、都議たちが床に昏倒していく。

一分も経たずに都議十六人は一人残らず床に倒れていた。

「やったぜ。あいつのお陰で戦う手間が省けた。十六人全部倒してくれるとは、太蔵さままだな」

「非モテ太ゼロ、だべっている場合ではない。相手は十六人を秒殺する強敵だ。我々四人で太刀打ちできるかどうか」

瘦せゼロが河村を諭した。

「じゃあさ、太蔵と仁大田が睨みあっている間に、階段のぼっちまおうぜ。題して漁夫の利四銃士作戦」

「作戦でも何でもないし、そのまんまではないか。貴殿という男は瘦せゼロは頭を抱え込んでしまった。」

仁大田は村杉と向き合い、対峙した。

「雑魚さんたちには眠ってもらいました。さて、次は仁大田さん、あなたです」

「太蔵……お前、もう俺が知っている太蔵じゃねえな。俺を倒すだと？ 大した自信じゃねえか。だが、過ぎたる自信はただの勘違い自信過剰馬鹿に過ぎねえんだよ。飛び道具に頼る卑怯者は特にな。そいつを俺が今、お前に教えてやる！」

仁大田が村杉に向かって走り出す。

「面白い。……仁大田さん、パワーアップアイテムのスタンガンはどうしました？ 忘れちゃいました？」

「あ！ やべ！ 忘れてた」

仁大田はズボンのポケットに両手をつ込み、両手にスタンガンを握った。

「今日はダブルだぜ！」

「残念ですが、それを使わせるわけにはいきませんよ。さあああああああああ！」

村杉がラケットを立て続けに二回振った。二発ともスタンガンを直撃した。

「てめ！　ぶっ壊しやがって！　弁償だ！　弁償！　立ち上がるんだ日本に請求するぞ！」

「ふ。果たして今はそういう場合ですかね。さあああああああああああああ！」

村杉の腕が動いた。

「う！」

仁大田の両膝を鉄球が襲った。どうやら皿が割れたようだ。仁大田はその場にへたれこんだ。

村杉はなおも攻撃を続けた。今度は仁大田の両肩に鉄球が命中する。

「ぐぬ！」

「いい眺めです、仁大田さん。いや、仁大田。お前の様な格闘しか能のない筋肉馬鹿はこうして圧倒的な力の前に惨めに敗北し、勝者に跪いているのが身の丈に合っているのだ。……。仁大田、僕はあのときのことは忘れたことはない。あのとき、お前は僕を見捨てたのだ」

村杉の脳裏に輪美明宏事件が呼び起こされた。忘れもしない、大阪城での戦いで村杉は敵の手にかかり、首を絞められ、あわや絞殺の危機にあった。しかし、そのときの仁大田の対応は村杉にとって残酷なものだった。

——太蔵、苦しいか。そりゃ、首絞められたら、息出来なくて苦しいよな

——太蔵、お前、馬鹿な問題発言をしてマスコミに面白おかしく報道されていたとき、説教しに行った俺に会わなかったろ？ お前に無視されて、俺はとんだ赤っ恥をかかされたぜ。あの時のことは忘れねえ。いつか、お前に仕返ししてやろうかと思ってたんだよ、俺は

——お前なんて知らねえな。早いとこ、絞殺されちまえ。いい気味だ。俺は今、気分がいい。最高だぜ。満足満足

「待てよ太蔵、あのときお前を見捨てたのは俺だけじゃねえ。原石都知事たちだって」

「悪いのは俺だけじゃない、あいつらも同類だつてやつか？ 見苦しいよ、仁大田。まずはお前を血祭りに上げる。原石都知事？ あいつはもう年だ。じきに死ぬ。復讐するまでもないし、まだあいつはそれなりに力を持っているからな。時期が来れば、奴らも僕の恥

辱を味あわせてやるさ。さて、無駄話は終わりだ。おねんねの時間だよ、仁大田」

村杉が鉄球を投げ、ラケットを動かした。鉄球は仁大田の額に飲みこまれていった。仁大田はどおと音を立てて、頭から床に倒れた。

「ははは。あーはっはっはっはっはっはっ！ ついにやったぞ！
につくき仁大田を倒してやった！ あーはっはっはっはっはっはっ
！」

ひとしきり笑うと、村杉は平静を取り戻した。

「ふう。……いよいよ四人組の皆さんの番ですよ」

村杉は周囲を見渡した。

「なに！」

四人は村杉の視界からきれいさっぱりと姿を消していた。

「どこへ行った！ まさか二階に！？ してやられた！」

村杉は階段へと走った。

第十五章 再チャレンジ男の退場

（しまった！ 鉄球が山積みされたボール入りを忘れた。ラケットだけ持って手どつする僕。落ちつけ、落ちつくんだ）

背後を振り返った村杉。右手首に激痛が走る。

「うあはっ！」

村杉はラケットを落とした。河村が剣で村杉の右手首を叩いたのである。

「お前たち、どうして！」

痩せゼロが村杉の左手首を叩いた。またも鋭い痛みが村杉の体を駆けまわった。

「うおおおおおお！」

「油断したな太蔵センセ、俺たちはお前が仁大田といちゃついている間にお前の背後に回り込んでいたんだよ」

「そういうことです。非モテ太目ゼロさんのアイデア、うまくいきましたね」

箕輪の竹刀が村杉の腹をえぐった。

「ぐおはあっ！」

「俺の作戦勝ちさ。題して、階段を上ったと見せかけて背後に回る作戦。名案だったろ？」

河村は得意げに言った。

「まあな。しかし、その程度のこと、人並みの知能がある者なら、誰でも思いつくと思うが」

痩せゼロの発言に、河村は気を悪くしたようだ。

「何だよ、感じ悪いな。ま、いいや。こいつとつととやっちまおうぜ？ とどめは春雄さんの張り手ということで。じゃ、春雄さん、お願いするわ」

「ほいきたである」

近藤が村杉に近付いていく。

「ま、待ちなよ、君たち。僕を誰だと思ってるんだ？ 村杉太蔵だよ？ 元衆議院議員で、夏の参議院選挙で当選して参議院議員になる男だよ？ それをこんな目に遭わせていいと思ってるのか？ 後で後悔するよ絶対。まあね、ここでやめておけば、大目に見てやらないこともないことはない。さあ、悪いことは言わない、早々に立ち去りたまえ」

村杉は大量の汗をかきながらも命乞いをした。命乞いとは聞こえないところがみそであった。

「だってよ。どうするよ春雄さん。このまま帰るか？」

「馬鹿な。このまま退くなど、断じてあり得ないのである。どすこいである！」

近藤の張り手が村杉の顔にヒットした。村杉は後ろへ倒れた。

「馬鹿は片づけたのである。二階へ直行である」

近藤が階段へ向かおうとする。

「ちよつと待った」

「何である？」

「察してくれよ春雄さん。この暑さだぜ？ それにこの格好見てみ？」

「？」

「暑いんだよ。このマスクの中は特にな。もうびっしょびしょだよ。だからトイレタイムな。顔洗ってくるわ」

河村はトイレへと歩き出した。

「それなら私も」

瘦せゼロも後に続こうとした。

「お前は駄目だよ。俺顔洗うって言っただろ？ 俺が洗顔している間誰も入ってくんなよ？ ヒーローは正体を明かさないもんさ」

「ちっ」

痩せゼロが舌打ちしたが、河村は構わずトイレへ入っていった。

「奴らは二階へ来るつもりだ。くそ！ 俺の立てた計画が！」

原石は机を叩いた。

「仁大田や村杉が余計なことをしなければ、うまくいったんだ。今頃奴らは、都議団に袋にされて虫の息だったはず。くそ！ 仁大田！ 村杉！ 村杉の比例立候補を取りやめにさせたい気分だぜ」

「まあまあ都知事。そう興奮しないで。まだ我々がいるではありませんか？」

瀬猪が原石をなだめた。

「そうですねや都知事。御子息もおられるし、大スターの知多さんや利綿さんもおられる。それだけでなく、私や田倉さん、瀬猪さんまで。我々が奴らを都知事には近づけませんにや」

田前が原石を勇気づけようと言った。

「にゃあにゃあうるさいんだよ、先生！ 言われなくともわかつと

る。・・・・・・しかし、奴らは伝説の四銃士なのではないか？」

「そんな馬鹿な。都知事もおっしゃっていたではありませんか、あれは奴らが自分たちで捏造・流布したものだ」と

「そうだといいたがな」

原石は険しい表情でテレビ画面を睨んだ。

第十六章 ニート犯罪者

田倉がドアを開け、都知事室に入ってきた。書類を手にしていた。

「都知事、監視カメラの映像を警察庁に照会した結果、侵入者のうち、二名の確認が取れました」

田倉が書類を原石に手渡した。

「何者だ？ 左翼か？ 市民団体か？ 変態オタクか？」

原石が急いで書類に目を通す。

「いえ、そのどれでもありません。いわゆるニートです」

「ニートだと！？ ニートがなぜこんな真似を」

「近藤春雄、二十三歳、無職。修専大学中退。箕輪晴子、二十歳、無職。二人とも、五年前に傷害事件を起こしています」

「どんな事件だ？」

「民自党の代議士を襲撃したんですよ。二人は児童ポルノ法改正案に反対の意思をもっており、推進派議員を襲ったというわけです」

「今度と似たような事案じゃないか。まさか、こいつらの所為で児ポ法改正は頓挫したと言っんじゃないだろうな？」

原石が田倉を厳しい目つきで見つめた。田倉はまっすぐに見つめ

返す。

「そのまさかです」

「馬鹿な。たった二人のニートによつて、法律案が潰されただど！
？ そんなことがあつていいはずがない！」

原石は近藤と箕輪の情報が詰まつた書類を握り潰した。

「田倉君、今度はこいつらの思い通りにさせるわけにはいかん」

「もちろんです。そのための手は既に打つてあります」

「何だと？」

「ニートにはニート、それが私のやり方です。魔王陛下のご助言を聞き入れておいてよかった。あの男が、こんなところで役に立つてくれるとは」

田倉が片頬だけ笑みを浮かべた。

「どういうことだね、田倉君」

「もうじきご覧にいきます」

河村たち四人組は二階へと続く階段を上がっていた。

「もしかしたら、各階に敵が控えているかもしれない。油断するな。気を引き締めて行け」

瘦せゼロが注意を促した。

「へっ、どんな野郎が出てきたって、俺のはいやあたたたたたはわちゃあー！拳で一撃で病院送りにしてやるよ」

「はいやあたたたたたはわちゃあー！拳？　これまた凄いネーミングセンスだな」

「ほんとですよ、非モテさん。名前は大事ですよ。もうちょっと考えからつけた方がいいんじゃないですか」

箕輪が河村に苦言を呈した。

「何だよ、よってたかって。なあ、春雄さんはいやあたたたたたはわちゃあー！拳でいいと思うだろ？　いけてるだろ？　な？」

河村は春雄に振ってみた。春雄は足を止めて腕を組んだ。

「むう。はいやあたたたたたはわちゃあー！拳ではあまりに安易過ぎる気がするのである。非モテゼロさんは何を参考にその拳法を編み出したのだ？　やはり、そこを加味した名前にするべきだと春雄は思うのである」

「えーと、北斗の拳に蒼天の拳に燃えよドラゴンにゲルルルーシュ潤柔道にOD三日少林寺拳法に真綾二十分ひとりチャンバラ、だったかな？」

「それである。それを名前に活用するのである」

「じゃあ……北斗蒼天燃えよ潤柔道OD三日月少林寺真綾ひとりチャンバラ拳、てのはどうだ？」

「長つたらしくて何が何やらわかりませんよ。もうさっきの、何でしたっけ、はいやあ何とかでいいんじゃないですか？」

箕輪は面倒臭げに言った。

「お前はさっき文句言ってたじゃねえか？ 何だももう」

「あの世へ行く前に名残惜しげに無駄話か？」

ひとりの男が四人の行く手に立ちふさがった。

「何だお前は！」

先頭を歩く河村が誰何した。

「俺の名は関根哲夫。犯罪者にして二ートだ」

黒の短パンにＴシャツというラフないでたちの小柄な男は、両手にナイフを握っていた。小太りで腹が出ている。河村と素晴らしい腹相撲がとれそうな体型であった。

「関根哲夫？ 知らねえなあ。みんな、知ってるか？」

「いや」

「知らんのである」

「右に同じく。普通に知りませんよ。あのう、すいません、有名な方ですか？」

関根は笑みを浮かべた。それは自嘲的な笑いと思われた。

「知らないか。まあ、無理もないな。知る人ぞ知る二ト犯罪者、それが俺だ。俺はかつて、無職青年という男を京王線新宿駅西口で襲って逮捕されたんだよ。どうやら悪魔にそそのかされてしまったらしかった。だが、初犯だったこともあり、俺はブタ箱には入らなくて済んだ。なぜだか知らないが、警察署にいる間に、俺は国家権力の工員としてスカウトされたのさ。今日が俺の初仕事。ここから先にお前らを行かすわけにはかない。死んでもらうぜ！」

関根が両手のナイフを振り回しながら、階段を駆け下りた。

「あぶねっ！」

河村がぴたりと背中を壁にくっつけ、ナイフを回避すると同時に、右足を突き出した。

「うわっ！」

河村の足に関根が足を奪われた。

「うわあああああああ！」

関根は階段を転がっていき、壁に頭をぶつけ、気を失った。

「あぶねえじゃねえか、こいつ。死ねよ」

河村が気を失っている関根の後頭部を剣で殴打した。一撃、二撃。三撃目で痩せゼロが河村の腕をとり、制止した。

「やめろ。もう気絶してる。十分だろ」

「けつ。……これくらいで勘弁しといてやるか」

四人は関根を残し、その場を後にした。

第十七章 黒との再戦

四人の中で、最初に二階へ足を踏み入れたのは河村だった。

「よっしゃあ！ 一番乗りだぜ！」

「だから何だと言うのだ。子供じゃあるまいし、はしゃぐな」

痩せゼロが即座に突っ込みを入れた。

「来たか。あんたらを待っていたよ」

全身黒ずくめの人物が四人を待ち構えていた。黒のマントをはおり、黒い布をすっぽりと頭に被っている。

「その声は！」

黒の人物が布を床へ落とした。

「枢やな！」

枢やなは漫画『黒執事』の原作者として有名であった。

「太いの、知り合いか？」

「ああ。ちょっと昔あってな」

かつて河村と枢はある事件で戦いを演じたことがあった。

「久しぶりだね」

「枢やな？ 黒執事の？ 本人ですか？」

箕輪は半信半疑のようだ。

「いかにもさようだ。黒執事を世に送り出し、漫画を足掛かりに世界征服を狙う女漫画家だよ」

枢が不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「なぜお前がここにいる！ 俺たちの邪魔をしに来たのか！」

「だとしたら、何だって言うんだよ？ 悪いか？」

なおも枢は不敵な笑いを浮かべ続けていた。

「なぜですか、枢さん。あなたは漫画家のはずです。漫画規制には反対するべき立場じゃないんですか？」

箕輪が枢を問いただした。

「へー、そんなふう考えたんだ。漫画家は漫画規制に反対すべし、か。何とも単純な思考だねえ。私はどうだっていいんだよ。私はエロい漫画は書く気はないんで、規制なんて関係ないね。この際、原石都知事に与していた方が、後々立場的にいいんじゃないかと考えて、ここにいる。原石都知事とはある人のつてでお近づきになれて

ね、それ以来の付き合いなんだ。……で、あんたが箕輪さん？」

「そうですけど。どうして私の名を？」

「田倉さんていう人から教えてもらったんだよ。あんたもニートらしいね。ふうん。だからかあ」

「何がですか？」

箕輪が不愉快そうに顔を歪め、枢を睨みつけている。

「なに、駄目なニート思考に染まりきってるなあって感じただけだよ」

「何ですか、この人。ムカつんですけど」

箕輪が眉を吊り上げた。

「箕輪さん、こいつのペースにはまったらいけないぜ。こいつは人を人とも思わぬ、性根の腐りきった女だ」

「随分な言われようだね。まあ、あんたまのような無能な人間が私のような有能な人間を理由もなく嫉妬し、悪しざまに言うのはよくあることだ。気にしないよ」

「何だと！」

河村が沸騰した。

「下らないお話はここら辺で。さあ、戦いに移ろうか」

枢が黒いマントを開いて見せた。マントの中は、銀食器のナイフやホークがぎっしりとあった。枢が両手の指に銀食器をはさむと、飛翔した。

「来るぞ！ 奴はナイフやホークを投げつけてくるイカレ女だ！ 叩き落とせ！」

河村は腰の兼を抜き放った。

「曲はどうしたんだよ？ かけないの？」

枢の両手から銀食器が放たれた。河村は走って移動しながら、飛来したそれを叩き落す。

「お前に言われるまでもないわ！」

河村はリュックからCDを適当に掴み、ラジカセにセットした。

「コードギアス 反逆のルルーシュR2 O.S.T.」の「Madder Sky」が流れた。

（これは、最終回でルルーシュがゼロに扮したスザクに刺殺するシーンのときに流れていた曲だ。なんか不吉な予感がする）

河村は頭から悪い考えを追い払った。

枢が着地と同時に第二撃を放つ。河村たち四人は攻撃を右に左にかわしながら、徐々に間合いを詰めていく。

枢が二度目の飛翔を行い、第三撃を繰り出した。河村は猛然と走って、銀食器を叩き落して突進した。

河村の目前に枢の姿があった。枢が両手を大きく振り上げた。それはまるで、鳥が翼を開くの似ていた。

「枢！」

河村が枢の胸を抜いた。

「……………河村、お前は英雄になるんだよ」

枢の声が河村の耳をとらえた。

「何！」

枢の体が床に崩れ落ちた。

「さっきのはどういう意味だ、枢！」

河村が枢を抱き起こし、枢の顔を覗き込んだ。

「私は、本心は条例改正案に反対だった。しかし、今後の立場を考えると、表立って反対運動を展開することはできなかった。私は、漫画を単なる野望実現の手段としか、最初は見ていなかった。だが、河村、あんたと出会い、お前の熱弁を聞いて、段々と考えが変わってきたんだ。私は、知らず知らず、漫画が好きになっていったんだ。……………私は、都知事から話を聞き、二つ返事で快諾してここに来たよ。複雑な気持ちだった。本当なら、河村、あんたたちと一緒に

に都知事と戦いたかった。でも、それは出来ない相談だ。そこで、あんたらの力を引き出す形で、あんたらと戦おうと考えたんだ。勘違いしないでくれる？ 私は手加減なんかするつもりはなかったし、わざと負けるつもりもなかった。むしろ全力で戦うつもりだった。私に倒される程度の力では、とてもこの上の階の連中には勝てないからね。だが、それは杞憂に終わったよ。あんたらは私の期待に答えてくれた。あんたらなら、都知事を倒し、漫画規制を止めることができるだろう」

「枢、お前……」

「いつまでばーっしてる？ 早く行け、都知事はこの上だよ。私はしばらく、横になってる。さあ、行きな」

「ありがとう、枢。感謝する。俺たちが必ずや、原石を打ち倒し、漫画規制を阻止して見せる。約束する」

河村は枢に礼を述べると、三階へと続く階段へと走った。三人もそれに続いた。

第十八章 原石延啓との戦い

「田倉君、どうなつとんだね。君が手配した男はあっさり倒されとるし、あいつは何だ、あの馬鹿どもを殺そうとしたじゃないか。殺人事件は困るぜ。俺はあいつらを叩きのめせと命じたはずだ」

「申し訳ございません。あの男には、よく言い含めておいたのですが」

田倉は顔色を失い、平身低頭の姿勢である。

「ニートなんか使うからだよ。まったく。あの漫画家も使えなかったしな。俺たちを裏切りやがって」

原石は苦虫を噛み潰した顔をしていた。

「まあまあ。三階には都知事のご子息が詰めておられます。今度こそ、奴らは終わりですよ」

瀬猪が口をはさんだ。

三階には、四人の男が河村たちを待ち構えていた。手には日本刀が握られている。

「待ちくたびれたわよ。レディを待たせるなんて、悪い男ね」

スーツ姿の男が、口を尖らせている。

「お前らは原石四兄弟か！」

「そうよお。あたしは宏高、それに伸晃、良純、延啓よ。パパがあんなたちを倒せつつうるさいのよ。あたしは漫画のことなんでもでもいいんだけど、パパの頼みは断れないのよねえ。そういうわけだから、あんたたちにはちょっと眠ってもらわよ。次に目を覚ます時は、パトカが警察署よ」

宏高が抜刀し、早速駆けだそうとしたところ、

「待ってくれ、宏高兄さん」

延啓が呼びとめた。

「なによ、延啓ちゃん？」

「こんな奴ら、僕ひとりで十分だ。兄さんたちはそこで見ていてくれ」

宏高が心から延啓を案じる表情をした。

（今のうちにCDをセットしまえ）

河村は急いで手を動かした。

それでもいったいこの僕に何ができるって言うんだ
窮屈な箱庭の現実を変えるために何ができるの

坂本真綾が歌う、テレビアニメ「ラーゼフォン」のオープニング
テーマ「ヘミソフィア」であった。

「いいの？ こいつらけっこうな強敵よ？ 三十人の警備員を倒したの見てでしょ？ 延啓ちゃんひとりで倒せるの？」

「警備員って言ったって、所詮は戦いの素人さ。僕らのように死線をくぐり抜けた人間に比べれば、ひよっこもいいところだ。それに、僕にはこれがある」

延啓が手に持ったビーカーを宏高に見せた。ビーカーの中は濁って見えた。

「そうね。じゃ、任せるわ。さっさと片付けてね。でも、殺しちゃだめよ？ わかってるわね？」

「了解了解」

延啓はぐいとビーカーの中の液体を飲みほした。

「行くよ、四銃士さん」

延啓の姿が河村たちの前から消えた。

「き、消えただと!？」

仰天した河村が辺りを見渡す。

「こっちだよ」

河村の左に延啓が立っていた。延啓が河村の腰を狙って、刀を一閃させた。

(やられる!?)

河村は自分が倒されることを確信した。

しかし、河村は倒れることはなかった。次の瞬間、痩せゼロが一步前へ出て、延啓の刀を受け止めていたからである。

「私は動体視力には自信があるのだ。なんせ、るろ剣を極めた男だからな」

ヒトは歩き続けて行く
ただいきていくために

不完全なデータを塗り替えながら進む
始まりの荒野を独り もう歩き出してるらしい
僕は灰になるまで僕で在り続けたい

「うおおおおおおおおおお！ 真綾よ、俺に力を貸してくれ！ 真綾パワー！」

河村は剣を抜き、延啓に斬りつけた。延啓は難なくそれを受け、二人は鎧迫り合いを演じた。

「俺の北斗蒼天燃えよ潤柔道OD三日少林寺真綾ひとりチャンバラ拳を受けて見ろ！」

「なに、北斗だと!？」

延啓が動揺を示した。延啓だけでなく、延啓の兄弟たちも動揺を隠しきれないふうであった。延啓の脳裏に、「輪美明宏事件」での原江啓之との戦いが蘇った。延啓は原江と戦い、無残な敗北を喫したのであった。

——あなたの描く絵画は、一度も受賞したことがないし、評論家から評価されたこともないそうじゃないか。画家ってのは何かな、自称していれば受賞歴や評価がなくても、画家になれるものなのか？

延啓はトラウマになっている原江の台詞を思い出していた。

「お前は原江の何なんだ！ 答えろ、デブ！」

延啓が大声で河村に問うた。

「デブだと！ てめえは今、この世で一番言っちゃいけないことを言っちゃまったな。そういう奴は、こうだ！ はいやあたたたたたほわちゃあー！」

河村が剣で刀を上押し上げ、腹突き出し、延啓に腹で体当たりした。

「ぐおっ！」

延啓は一メートルほど後方へ吹き飛ばされ、壁へぶつかった。

「今だ、みんな！」

「わかってる！」

「よっしゃあ！」

「ほいきたである！」

痩せゼロは延啓の頭を打ち、箕輪は喉を突き、春雄は顔に張り手を食らわした。

延啓は意識を失い、壁に背中をつけてずるずると床に落ちていった。

第十九章 春雄覚醒！ 00パワー！

「みんな見たか？ 秘拳・腹突き出し拳を。腰に力を入れて腹を突き出すのがポイントだ」

河村が三人に技の説明を加えていた。

「秘拳でも何でもなし、そもそも拳法じゃないだろう？ 腹が出ている人間にしか使えない技だ。誰に教わったのか知らんが、もっと万人向けのものはないのか？」

痩せゼロが酷評した。

「そんな！ そんな馬鹿なことがあるって言うの！ 延啓ちゃんは絵具を混ぜた水を飲んだのよ！ 負けるはずないわ！」

宏高はまだ延啓の敗北を信じ切れずにいた。

「うえっ。あの濁ったの、絵具だったのか。マジキモいぜ。頭いちまってんじゃねえのか？」

河村は気絶している延啓を眺めた。

「ていうかさあ、この倒れている奴、誰？ 俺知らねえんだけど」

「さあな。見ない顔だ」

「許さないわ！ 伸晃ちゃん、良純ちゃん、延啓ちゃんの仇をとるわよ！」

「言われずとも、わかっている。行くぞ、良純」

伸晃が良純を促した。

「ああ」

良純が一步前へ出た。

「来るぞ！ 攻撃に備えよ！」

痩せゼロが指令を飛ばす。しかし、伸晃は目を瞑ったまま、宏高は写真を見ているだけで、動き出す気配はない。

「すまん、良純、今はひとりで戦ってくれ」

「あたしも、ごめん、すぐ参戦するから」

「しょうがねえなあ」

良純は河村たちに向かって行った。

「あつ！ ラジカセ！ 早く新しいのかけねえと！」

河村は急いで新しいCDをセットした。

誰かを悲しませてまで 笑えなくても

そう言つて彼女は俯いてたんだ

夜に 泣いた

「この曲は、ステレオポニーの『泪のムコウ』である！」

近藤の目が爛々と輝き、力強い光を放った。「泪のムコウ」はテレビアニメ「機動戦士ガンダム00」第二期のオープニングテーマであつた。

「悪いな、みんな、このターン、春雄がもらったのである！」

近藤がどしどし床を鳴らしながら、良純に走り寄っていく。

「春雄が、春雄軍団が、ガンダムである！」

「何言つてんだ、お前。全然わからんぞ」

良純が刀を振り下ろす。近藤は驚くべき素早さで左へ動き、刀をかわす。

「お前、こんな世界で、満足か？ どすこいである！」

近藤が良純の耳元に囁き、張り手を良純の右頬に入れる。

「がっ！ くそつたれえ！」

良純もさるもの、一撃では倒れず、刀を横へ薙いだ。近藤は一步後退する。

泪の向こうが見えるの

輝いている いつか出会える

僕らのために 夜明けを待っている

「はoooooooooooooooo！ 00パワーである！ 刹那、春雄に力を分けて欲しいのである！ ほoooooooooooooooo！」

近藤は良純へ突進する。良純は斬りつけようとしたが、時すでに遅し。良純の顔に近藤の張り手が入った。

「どすこいこいこいこいこいこいこいこいこいであるー！」

近藤は立て続けに矢のように張り手を繰り出した。その数は二十発を数えた。

良純は立ったまま気を失っていた。近藤が張り手をやめるのと同じ時に、良純は床に昏倒した。

「良純ちゃん！」

宏高が写真から顔を上げ、驚愕の表情を見せた。驚きのあまり、口が大きくあぐりと開いていた。

「ちょっと、伸晃ちゃん、良純ちゃんがやられちゃったわよ！　いつまで叔父ちゃんのことを考えているつもり？　いい加減にしないよ！」

宏高が瞑想を続ける伸晃の両肩に手をかけ、大きく揺さぶった。

「す、すまない。良純はやられたか。ならば、私たち二人で倒すしかないな」

伸晃が目を開いた。

「良純ちゃんと延啓ちゃんの仇をとらせてもらっわよ」

宏高が河村たちに襲いかかるべく、駆けだした。

第二十章 箕輪のロリパワー

「ええーい！」

奇声を上げ、宏高が箕輪に斬りつけた。箕輪は竹刀で受け止めた。伸晃は痩せゼロと斬り結んだ。

「くっ！ 太っちょゼロさん、ロリアニメのアニソン、何かないんですか！」

箕輪が大声で河村に訊ねた。

「え？ ないよ」

河村は素っ気なく答える。

「何でないんですか！ 普何枚かは持つてるもんでしょうが！」

箕輪が宏高との対決そっちのけで顔を河村の方へ向けた。

「ないもんはねえよ。俺、ロリ系は見ないしな。なに、箕輪さんてロリコンなの？」

「幼女好きですけど、それが何か？ ロリを毛嫌いするもんじゃないですよ！ ロリアニメはもはや、日本至高の芸術・文化です！ ロリアニメを知らないということは、日本アニメを、いえいえ、日本を知らないということです！」

「そう言われてもなあ。確かに幼女はかわいいとは思うが、それだ

けだ。俺にはロリは性に合わないようだ」

「そんなんじゃない駄目ですよ！ 何でも挑戦しなきゃあ！ 都庁を襲っている割には、非モテ太っちょゼロさんは全然アニメに対する情熱を感じないですね！ いいですかあ！ 漫画とアニメは直結してるんですよ！ 連動してるんですよ！ 深く深く関係してるんですよ！ そしていまやロリは漫画・アニメの主要なジャンルとなっているわけなんです！」

「がたがたうるさいわね、あんた！」

宏高が箕輪の熱弁にいきりたった。

「あんたたちなんか、パパが言ったようにただの変態よ！ 未成年にエッチやらせてる漫画なんか、規制しちゃえばいいじゃない！ それの何がいけないの！ この、ヘンタイロリコン女！ どうせ処女よ、処女！ どう、図星じゃない？ 小さい女の子が好きななんて言う女は、みんなねねちゃんに決まってるわ！ そんな女はね、頭のねじが何本か緩んでるか、外れてしまったイカレ女に違いないのよ！ あんたなんかは、小さい女の子とやりたいと思っている犯罪予備軍なのよ！ 女兒にいたずらして逮捕されるあんたの姿が目に浮かぶわ！」

箕輪と宏高は激しい鍰迫り合いを展開する。

「私が処女かどうかなんて、この際関係ないじゃないですか！ 言いたい放題言ってくれたね！ 私が逮捕されるとか、ロリコンに対する偏見で満ちてます。この社会には、犯罪に手を染めない、おとなしいロリコンの方がいっぱいいるんですよ！ イライラしてきたあ、ちよっと非モテデブゼロさん、CDないんですか！」

「太つちよの次は、ついにはデブかよ！　まあ、いつか言われるとは思ったがな」

河村は不平を述べながら、CDを交換した。

太陽は今日も輝き続けて

あの波の青さも変わらずキレイなの

あなたはもう居ないと

空も海も知らないのね

「コードギアス反逆のルルーシュ　キャラクターソングベスト」
に収録されている「果てしない未来」であつた。カグヤ役の女性声優・かないみかが歌っている。

「これは、カグヤの声！　ごおおおおおおおおお！　カグヤ萌え萌えパワー！」

箕輪は拳を押し出して鏝迫り合いから脱し、一步後ろへ退いた。

あなたに巡り会えて

全ては光り出した

果てしない未来を運命と感じた

一途に恋に落ちた

あの日を忘れない

あなた一人のために生きたかったの

「原石宏高、あなたにカグヤの気持ちがわかりますか！ ゼロを、ルルーシュを想いながら、ついに成就することのなかった恋を、あなたは理解できると言うんですか！ カグヤ、好きだあああああああああ！」

箕輪は宏高の喉を狙って突きを繰り出した。

「何言ってるのあんたは！ あたしだってね、実らない恋にやきもきしたことあんのよ！ 見くびらないでよ！」

宏高は竹刀を払った。

「あ！」

箕輪の体勢が崩れた。竹刀は下を向き、上体は隙だらけである。

「もらったわよ、ロリコン処女！」

宏高が刀を大きく振りかぶる。

箕輪の竹刀が逆袈裟がけ斬りに宏高の股間を打った。

「！ あたしの大事なところを！」

宏高の動きが停止する。顔が激痛に歪んでいた。

「面！」

宏高の頭を箕輪の竹刀が打ち据えた。宏高はぱたりと床に倒れた。倒れる瞬間、宏高のスーツのポケットから何かが落ちた。

「何だこれ」

箕輪が拾い上げると、それは写真であった。男が写っている。なかなかの男前である。

「これって……。アントニオ・バンデラスじゃ？」

箕輪はいつまでも倒れている宏高の背中を見つめていた。

第二十一章 ステレオポニーパワー

伸晃の顔が驚きで染まった。

「宏高が倒されただと！？　あり得ない。宏高はジョニー・デップの写真を見ることで、能力を大幅に向上させたはずだ」

「え？　この写真、デップじゃなくてアントニオ・バンデラスですけど」

箕輪が写真をひらひらさせて言った。

「バンデラス？　誰だそれは？」

「ハリウッド俳優ですかね？　私もよく知りませんが」

「ジョニー・デップじゃないなんて。さては宏高の奴、浮気したな。これでは、勝てなくても仕方ない。浮気性の者の愛など、所詮はまやかし、それが戦いに通用するはずもない」

「私はロリー筋なんで」

箕輪がにやりと笑う。

「そうか。君も。……私もある御方をずっと愛してきた。何十年も。その思いは、今日まで変わることはない。しかし、それはそれ。原石家の長男として、この場は君たちを見過ごすことはできない。悪いが、倒させてもらおう！」

伸晃が鎧迫り合いをしながら、痩せゼロの左側へと回り込む。後ろへ退くと同時に、痩せゼロの左腕を狙って刀を振り下ろす。痩せゼロが剣で受け止め、攻撃を防ぐ。

「この男、できる。非モテデブ、何か曲をかける！」

痩せゼロが刀をはじいて、後退する。

「おう！」

答えない毎日がただ過ぎて行く時間が
これから先どうなるだろう わからない
闇よりも深い夜の孤独に惑わされてた
だれかに今気づいてほしい
ここから逃げ出したいから

「これは、ステレオポニーが歌っている『ツキアカリのミチシルベ』である！」

近藤が興奮気味に言った。『ツキアカリのミチシルベ』はテレビアニメ『DARKER THAN BLACK 流星の双子』のオープニングテーマである。

痩せゼロは伸晃と対峙しながら、耳をすました。

「嫌いじゃないな。ところで伸晃さん、貴殿はもうおひとりだ。勝

機は薄いだろう。それなのに、どうしてまだ戦いをやめない？ 退いてはどうだ？ 三十六計逃げるに如かず、と言うぞ？」

「私は逃げるわけにはいかないのだ。人には誰でも、不退転の決意で臨まねばないときがある。今がそうだ。私は愛している人のためにも、君たち四人を倒さねばならない。君らだって、愛する漫画のために戦っているんだろう？ 愛のためなら、人は負けるとわかってる戦いにも敢然と挑んでいくものだ」

誰かが言った言葉が気になって惑わされて

争いたくなんてないから

何も言えない夢や理想はあるけれど気持ちばかり

先に行つて現実がずっと後ろから僕を見てる

「うおおおおおおおおおおおお！ ステレオポニーパワーだああああああ！ 今行くぜ！」

河村が駆けだした。伸晃のもとへ向かつて行く。

「春雄にもステレオポニーパワーが！ ほはおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

近藤も河村の後を追う。

「私だって、私だって、ステレオポニーは好きなんですから！」

箕輪も負けじと走り出す。

答えない毎日がただ過ぎて行く時間が
これから先どうなるだろう　わからない
ツキアカリのミチシルベ
雲を超え僕に届け　進むべき道を照らしてよ
今日がどんなに壊れそうでも

伸晃は四人に包囲された。なぜか伸晃の顔には笑みが浮かんでいた。

「今だ！　一斉に行け！」

四人は同時に攻めかかった。伸晃は痩せゼロの剣は受け止めることに成功したが、他の三人の攻撃は許すこととなった。河村の剣と箕輪の竹刀は伸晃の頭を打ち、近藤の張り手は顔にめり込んでいた。伸晃は床に転倒した。

「原石四兄弟、敗れたり！」

河村が勝利宣言をした。

「ところで、こいつ何で笑ってんだ？ 俺たちにやられるという恐怖のあまり、おかしくなったのか？」

「貴殿は馬鹿な男だな。原石伸晃はそんな男ではない。この男は、我々が漫画に対する愛のために戦っていることを理解し、それを我がことのように喜んでいたのだ。原石伸晃とは、そういう男なのだ」

「へー、そうなのかあ。よくわからんが。お前、何でそれがわかるんだ？ もしかして、友達か？」

「馬鹿を言うな。剣を交えた間柄、それくらいのことはわかる」

「戦えばわかるもんなのか」

「こ、これは！」

突然、近藤が大声を出した。近藤は携帯電話の画面を眺めている。

「どうした？」

三人が近藤の周りを囲む。

「これを見て欲しいのである。憎き原石の工作員・廃人無職青年の新たな破壊活動である」

近藤は廃人無職青年が管理するブログ「廃人ニートは小説を書け

るか？」のひとつの記事を三人に見せた。

——エヴァはほんとつまらん。背伸びしたい子供向け、世の中の何の役にも立たないキモくて偏屈な哲学オタク・思想オタク向けのアニメだろ笑。

「こいつ、先輩の言うとおり、絶対工作員ですよ。エヴァを悪く言う奴なんて、日本人じゃないです」

箕輪が眉間に皺を寄せて言った。

「間違いないのである。今度はエヴァファンの精神攻撃をするともに、日本を代表するアニメであるエヴァの評価を低下させ、最終的には日本アニメの国際社会における失墜を目論んでいるのである。だが、春雄が居る限り、断じてそうはさせないのである」

近藤はめらめらと戦意を燃やしていた。

「おいおい、これが終わったら、今度は廃人無職青年をやるつもりかよ？ 勘弁してほしいぜ。……。あちー。ちよっとトイレ。もう一回、顔洗ってくるわ」

河村はトイレへと走っていった。

第二十二章 痩せゼロ、凶弾に倒れる

「二〇一〇年五月、東京は漫画愛好家にとって戦場と化した。原石慎太郎東京都知事が青少年健全育成条例改正案を打ちだし、漫画規制を計画したのだ。漫画愛好家にして、伝説的な漫画の守護神・近藤春雄はネットで反対運動を展開していたが、ある日、某ブログの記事を読み、ネット反対運動に見切りをつけ、実力行使を思い立つ。春雄はかつて児ポ法改悪阻止のときともに戦った戦友・箕輪晴子に共闘を呼び掛ける。二人は東京都庁へと戦いに赴いた。そこでデブと痩せ、二人のゼロに出会った春雄と箕輪は、二人に加勢する。こうして四人は原石たちと死闘を繰り広げていく。襲いくる強敵たち警備員三十人衆、民自党都議団四十九士、仁大田厚、村杉太蔵、関根なんとかという二ト犯罪者、漫画家・枢やな、原石四兄弟。死闘に次ぐ死闘を制した四人は今、三階に居た。そして春雄は非モテデブゼロがトイレから帰るのを待っていた……」

近藤は落ち着きがなく、トイレの前をぐるぐると回っていた。

「またですか、先輩。だから解説は要りませんって。みんな事情は知ってますよ。ね、痩せゼロさん？」

「そうだな。にしても、あれは遅い」

「大きい方でもしてるんですかねえ」

と、そこへ河村が現れた。

「わりいわりい。お待たせ。さあ、行こうぜ」

河村が三人を促し、階段へと歩き出す。河村、痩せゼロ、近藤、箕輪の順である。

「ところで、痩せ、お前はなぜ都庁を襲撃してるんだ？ やっぱ、漫画を守るため立ち上がったのか？」

「ふつ。無論だ。私は漫画とはなかなか深い関係にあってな。どうにも今回の暴挙、黙って見ているわけにはいかなかったのだ。私は漫画が好きだ。愛してやまない。漫画は読む者に感動と力を与え、現実を忘れさせてくれる。漫画は文化であり、芸術なのだ。私は漫画に育てられた人間だ。漫画には何度も助けられたことが。今度は私が漫画を助ける番なのだ」

「痩せ、お前って情熱家だな」

河村は痩せゼロに感心することしきりであった。

「ふふふ、照れるな」

「犯罪者同志、仲がいいことだ。仲良く眠れ」

四階に機関銃のようなものが置いてあり、軍服にを着、ヘルメットをした中年男性がそばに座っていた。もうひとり、竹刀を手にした額の後退した男が立っていた。機関銃の銃口は河村に向けられていた。

「危ないっ！」

痩せゼロが河村を突き飛ばした。機関銃が火を噴いた。

ダダダダダダダ！。

痩せゼロの体に弾丸が命中し、痩せゼロが踊るように体を激しく揺らした。痩せゼロは階段に転がった。

「ダンスは楽しいかね？ ひやははははははははは！」

機関銃を放った男は愉快そうに大笑した。

「痩せ！」

河村は痩せゼロを急いでひっぱり、三階までおんぶして行った。近藤と箕輪は男たちが降りてこないか警戒した。河村が痩せゼロを壁にもたれかからせた。

「痩せ！ しっかりしろ！ しっかりするんだ！」

河村が痩せの両肩に手を置き、揺さぶった。

「……………う！ どうやら、実弾ではないらしい。死にはしないだろう。内出血ってところだな……………ぐふっ！」

「もういい、喋るな！ 今すぐ救急車を呼んでやる！」

「馬鹿が、何を言ってる！」

痩せゼロが物凄い力で河村の腕を掴んだ。

「こんなことで、すべてを無駄にするつもりか！ 漫画を守る戦いはどうする？ 途中で投げ出すつもりか？ 大事の前の小事だ！」

一時の感情に流され、大局を見失ってはいけない！ 貴殿らには、やらねばならないことがあるはずだ！ 漫画を守るといふ使命を、忘れたか！ 貴殿らしいのだ！ 私のことはいい。早く行け。都知事たちを倒し、悪しき規制から漫画を守るのだ。デブゼロ、お前は私の前座などではない。お前こそが、ゼロなのだ。デブゼロよ、漫画を守り、漫画を愛する人々を救うのだ！ 何をもたしめる！ 行け！」

「わ、わかった」

「ほうほうほう。感動の場面ですか？」

竹刀を肩に担いだ男が階段を降りてきた。

「お前は何者だ！」

「私？ 私を知りませんか？ それはいささか困りましたな」

男が冷たい一瞥を河村に送った。

「私は塚戸宏。教育者です。民を想い、国を憂う、真の政治家である原石都知事に刃向かってくる愚かなあなたたちを、更生して差し上げます」

「塚戸宏！？ あの塚戸ヨットスクール事件の体罰イカレオヤジか！」

塚戸宏は過度の体罰で生徒二名を傷害致死に、一名を病死に、二名を行方不明にさせた、恐るべき体罰教育を行う人物として有名だった。監禁・傷害致死で逮捕され、懲役六年の刑で服役していた。

原石慎太郎はその支援者として知られていた。

「私は正常ですよ。そして正義の化身です。漫画なんてものがあるから、日本の若者や子供がおかしくなっただんです。あんなもの、なくなってしまう方がいい。まずは特に有害なものを規制します。『非実在青少年』はその手始めに過ぎません。次に規制範囲を広げていきます。最後は漫画そのものを出版させなくさせます。そうすれば、日本の若者や子供は古き良き日本のそれに戻るのです。礼儀正しく、慎み深く、素直で真面目で勤勉な若者・子供が帰ってくるのです。それを邪魔するあなたたちは、邪悪な漫画に犯された情緒障害者に過ぎないのです。どうせ脳幹の機能不全を起こしているに違いありません。私が治して差し上げますよ」

塚戸が竹刀で自分の左手のひらをぱしぱしと叩きながら、河村たちに近付いていく。

「の、のうかん？ 何言ってるんだこのオヤジは？」

河村は得体のしれない塚戸に恐れを抱いていた。

第二十三章 監禁・傷害致死体罰オヤジ、自称教育者・塚戸宏との死闘

「竹刀には竹刀です！　ここは私の出番ですよ！」

箕輪が階段を駆け上がり、塚戸の喉を狙って突きを放った。

「箕輪さん、こいつは相当やべえ！　気をつけろ！　安易に近づくな！」

河村が慌てて忠告を発した。

塚戸は苦も無く箕輪の突きを外した。

「ほほう。少しはお出来になるようですね。どれ。遊んで差し上げましょう」

塚戸が一步踏み出し、竹刀を振り下ろす。箕輪の面を狙った一撃である。

「くー！」

箕輪は受け止めた。塚戸がすぐさま間合いを詰める。

「これは悪し。ほらほら、ここが御留守です」

塚戸が箕輪の腹を足で蹴った。

「ぐおおっ！」

箕輪は一メートルほど吹き飛ばされ、背中を床にぶつけた。

「なんか凄い音がしたな。先生、全部片付けしないで下さいよ。私にも残しといてくれないと困りますよ」

上の方から男の声がした。

「母田神閣下、あなたはさっき一人倒したじゃありません。それで我慢してください。……さて、女性の方、あなたはまったくまるでなっていないせん。お粗末お粗末。未熟に尽きます。まあ所詮、女性です。如何に努力したところで、女の力では、この程度のものでしょう。女性は、竹刀なんて持つものじゃありません。女の人は、男性に守られて生きるべきなのです。女の人は弱い存在ですから。もちろん、か弱く守られている存在である女性は、分をわきまえて常に男性に従い、男性を立てなければなりません。それが女性の本来のあり方なのです。女性は仕事なんかせずに、家庭で子供を産み育てていればいいのです。家庭と仕事の両立何かできません。女性が社会進出してから、躰が疎かになり、子供が荒れ始めたのです。女性は就職しなくてもいいですし、学校なんか行かなくてもいいのです。ただ家事と育児だけを学べばいいのです。選挙権も不要です。女性が政治に口をはさむとろくなことになりません」

「この糞ジジイ、さつきからとんでもないことばつか言ってるんですけど。超ム力つきますよ」

箕輪が立ちあがり、竹刀を構えた。

「おやおや、日本語も言葉づかいもなっていないせん。私のような年寄りに対しては尊敬する心を持たねばなりません。正しい日本語を喋れないから、政治テロなどに走るのです。あなたがたは、もう一

度一から教育を受け直すべきです。幼稚園からはじめなければなら
ないでしょう」

「食らえ！」

河村が塚戸に斬りつける。塚戸は受け、河村の剣を払い、河村の
胴を狙う。何とか河村は後退し、攻撃をかわす。

「私は物ごころつく頃からあらゆる武術を習得してきました。柔道・
剣道・空手・合気道・相撲……。私は武に関してもプロの
教育者です。その私に、あなたがた三人のようなずぶの素人が勝て
るありません。尻尾を巻いて退散するのが正しく賢明な選択です」

「黙るのである！ 春雄軍団は絶対に退却はしないのである！ 春
雄軍団は命を賭けて、漫画を死守するのである！ 漫画が滅びると
き、日本もまた滅びるのである！」

近藤が塚戸に張り手を送る。塚戸は後ろへ退き、回避した。

「漫画なんかなくなっただって、この国はびくともしません。馬鹿な
ことを言わないで下さい。漫画は害悪です。漫画は薬物です。漫画
は麻薬です。この偉大な神国日本を侵食する、暴力的で低俗で下品
で幼稚な無内容の、有害なだけの汚物に他なりません。あんなもの
は、なくさなければならぬのです。同時に、あなたちのような
漫画中毒者もです。私が性根を叩き直して差し上げます。この竹刀
で。私はこの竹刀で何人もの若者を更生させてきました。途中、失
敗したこともありましたが。まあ、教育の世界では、そういうこと
はよくある話です。さあ、お仕置きの時間です」

「お仕置きされるのは、お前だぜ、体罰イカレジジイ！」

河村がラジカセをいじっている。曲が流れ始めた。

いらない何も 捨ててしまおう

君を探し彷徨うMY SOUL

STOP THE TIME, SHOUT IT OUT

がまんできない 僕を全部あげよう

「何ですか、これは。洋楽まみれの下らない曲です」

塚戸が一蹴した。

「これ、アニソンじゃないんじゃないですか？」

箕輪が疑問をさしはさむ。

「B・Zが歌う『LOVE PHANTOM』。ユーチューブにアップされていたMADアニメ『リアルアンパンマン』で使われていた曲だ。一応、アニソンはアニソンだぜ」

河村が説き明かす。

「リアルアンパンマン！ あの不朽の名作の名がこんなところに出るとは！ 意外である」

近藤が驚いた顔を見せた。

「うおおおおおおおおおお！ リアルアンパンマンパワーだ！」

河村が力いっぱい叫び声を上げた。

「馬鹿げてます。そんなこと、ありえません」

「どうかな！」

痩せゼロが剣を塚戸に投げつけた。塚戸が払い落とす。

「まだこんな力がありましたか。だが、無駄です」

「無駄なことを痩せがするわけねえだろが！」

「！」

塚戸の眼前に河村が迫っていた。河村が剣を振り下ろす。塚戸ははしとそれを受け止めた。

塚戸と河村は鏝迫り合いを繰り広げた。近藤が塚戸の背後に回り込み、体当たりをする。

「これしきのこと、やられはしません」

塚戸が身を翻す。近藤が河村にぶつかった。

「うおわっ！ 何やってんだよ、相撲取り！」

河村が文句を垂れた。

「ここは学芸会ではありません。私があなたたちにたつぷりお仕置きし、教育を施しやる場所なのです」

「それはそれは、どうもありがとさんでしたあ！」

塚戸の背後で箕輪の声がした。驚いた塚戸が振り返る。塚戸の頭に箕輪の竹刀が打ちこまれた。

「がおっ！ この私が一本取られた？ 馬鹿な、そんな馬鹿な！」

こんなところで倒される私ではない！ 私は日本を代表する教育者だぞ！ 小娘如きが、生意気だ！ ぶちのめしてやる！」

塚戸の顔がそれまでの冷静さを失い、憤怒の形相となる。

「怖い顔したって意味ないんですよ、この女性差別・女性蔑視のイカレ糞ジジイ！」

箕輪が鍔で塚戸の顔を殴りつけた。塚戸の体は吹っ飛び、壁に頭を叩きつけ、気絶した。

第二十四章 閣下との戦い

「おい、春雄さん」

河村が近藤と見つめ合う。

「俺はそういう趣味はないからな？」

「は、春雄だつてそうなのである。何を勘違いしているのか、春雄には理解不能である」

「そうか？　なら安心したぜ」

「あ、でも、近藤先輩つてシヨタコンなんですよ。というか、シヨタ一筋ですけど」

箕輪が二人の会話に割って入る。

「シヨタだつて？」

河村の声に警戒の色が混じる。

「非モテデブゼロさんは大丈夫ですよ。太ってますし、さすがにもう少年じゃないでしょ？　先輩の射程範囲はせいぜい中学生辺りまでらしいですから」

「箕輪君、ぺらぺら余計なことを喋るななのである」

近藤はぶいとそっぽを向き、歩き出した。

「痩せ、大丈夫か？」

河村が壁によりかかる痩せゼロに駆け寄り、声をかける。

「駄目だな。体中が痛む。しばらく動けそうにない。さっきも言っただろう。私は置いて行け」

「わかった。原石を倒したら、合流しようぜ？　な？」

「ああ。ここで待ってる。必ず成し遂げる。きつとだぞ？」

「ラジャー」

河村は親指を立てた。痩せゼロもそれを真似した。

機関銃を担いだ男が階段を降りてきた。

「なんと。あの塚戸先生が倒されるなんて。．．．．．くくくくく。ひゃーはっはっはっはっはっ！　とうとう私の出番というわけか！　感謝します、魔王陛下！」

「魔王陛下？」

近藤が意味がわからないという顔をした。

「聞け、賊徒ども！　私の名は母田神俊雄。元航空自衛隊幕僚長・

元空将だ。私のことは閣下と呼ぶように。無礼は許さん。私は七月の参議院選挙を『立ち上がるんだ日本』から立候補することになっている。だが、参議院議員になることが、私のゴールではない。私の望みは、いずれは衆議院議員となり、総理にまで上り詰めること！ 私が首相になることで、このふやけきり、墮落し、汚染された日本は真の再生を見るのだ！ 対等な日米同盟、憲法改正、北方領土・竹島の奪還、尖閣諸島の死守、拉致被害者の救出、靖国神社の国営化、徴兵制復活、自虐的な歴史教科書の全廃。すべてはこの母田神俊雄にしかできないことなのだ！ わかるか、賊徒ども！ まずは、参議院選挙への話題づくりのため、都庁を襲った貴様ら賊徒を撃退するのだ！ そして私は『輪美明宏事件』のときのように、再び時の人となる！ ひゃーはっはっはっはっはっはっ！ このような晴れ舞台を用意してくれたこと、心よりお礼を申し上げます、魔王陛下！」

母田神は機関銃を階段に置き、その場に座った。

「この人あれですよ、大阪城人質籠城事件のとき、ひとりで乗り込んで逆に人質にされた人ですよ」

箕輪が河村と近藤に顔を寄せ、説明した。

「さあ、床で寝たいのはどいつだ！」

母田神が照準を定める。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！ 痩せゼロの仇！」

河村が階段を駆け上がる。

「馬鹿め！ こっちは機関銃を持ってるんだ！ 突撃してくるとは、かなりの蛮勇だ！」

機関銃が弾を放った。

ダダダダダ！

河村は右に左に駆けあがり、弾を避けつつ進んだ。

「ちょこまかと小細工しておって！もらったあ！」

母田神が河村を捉えた。

機関銃の発射音が階段に響く。

「なにつ！」

河村は剣で弾を受け止め、駆けあがった。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！
お前を倒すのに、音楽は要らねえ！」

母田神の目と鼻の先まで河村が迫ってきた。

「ば、馬鹿な。私は、総理になる男。こんなところでやられてたまるかあ！ ひiiiiiiiiiiiiiiiiiii!」

母田神は機関銃を放棄し、河村に背を向けて逃げ出した。

「逃がすかよ！ はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村は床を蹴り、跳躍する。河村の蹴りが母田神の背中を直撃した。

「ぐおおおお！」

蹴りの衝撃で母田神が壁に激突した。母田神は鼻血を流して床に倒れた。

河村が母田神からヘルメットを奪い取った。

「なあこれ、使えるんじゃないか？ 要らねえか？」

近藤と箕輪は顔を見合わせた。

「いえ、私は要らないです。このおっさん、なんか整髪料べたと塗りまくってて、臭そうで汚れそうで」

「春雄も不要である。第一、サイズが合わないそうである」

「そっぴや、そうだな。春雄さんて頭でかくねえか？」

「ほっとけなのである」

近藤は不機嫌そうな表情で先を急いだ。

第二十五章 竹刀落つ

「痩せ、仇は取ったぜ」

河村がわざわざ痩せゼロのところに戻ってきて告げた。

「貴殿は馬鹿か。そんなことより、前へ進め」

「わかったよ。ちえ、なんだよ。じゃあな」

「貴殿が止めろ。絶対だ。わかったな」

「はいはい」

河村は痩せゼロを残し、四階へ向かう。

四階には利綿哲也と知多ひろしがいた。

「おい、利綿さん、ひとり減ってるぜ」

知多がガムを噛みながら言った。

「そのようだな。塚戸先生や母田神さんもやるものだ」

「そして、俺たちで残りの三人を仕留める」

「そうだ」

利綿が持っていた日本刀を抜き、走り出す。知多もホルスターから拳銃を抜きとり、構えた。

利綿が箕輪に斬撃を送る。箕輪は受け止めた。二人は鏖迫り合いへと移行した。知多は近藤と河村に睨み合っている。

「お嬢さんはどうして規制に反対するのかね？ 女性ならエッチなものの規制に賛成するんじゃないのか？」

利綿が箕輪に問いかけた。

「私は幼女が好きなもんでしてね。人と違うことが、そんなにいけないことですか？」

「いけないね。誰か専門の医師に診てもらった方がいい。あなたは異常なんだ」

「人を異常者扱いとは、感心しませんね！」

「怒ったのかね？ だが、怒ってもあなたが異常性愛者である事実に変わりはない」

「何だとお！」

箕輪が青筋を立てて怒った。

「終わりだ」

利綿が刀を素早く動かし、竹刀を絡め取った。竹刀は床に転がり落ちた。

「え？」

箕輪はぼかんとしている。利綿は箕輪の両肩を打ち、胴を抜いた。箕輪は崩れ落ちた。

「箕輪君！」

「箕輪さん！」

近藤と河村が絶叫した。近藤が箕輪のもとへ駆け寄ろうとする。

「おおっと、あんたの相手はこの俺だぜ？」

知多が近藤の前を遮った。河村は箕輪のもとに駆け付けた。

「箕輪さん、しっかりしろ！」

河村が箕輪を抱き起こす。

「……非モテデブゼロさん。あたしはもうだめです。近藤先輩と非モテさんだけで、これからは戦って下さい……」

「何言ってるんだ！ お前がいなきゃ、やっていけるかよ！ 今まで四人で敵を倒してきたじゃねえか！ これしきのダメージで弱音吐いてんじゃないぞ！」

「私は、小学生くらいから年下好みでした。中学高校に上がっても、

それは同じ。最初は自分が変だとは思っていませんでした。しかし、そのうちに気がついて。本気で悩みました。自分は変態なんだって。だから、治そうとして。でも、駄目で。最後は、幼女好きであることをありのまま受け入れることにしたんです。そのときに決めたいです。絶対、幼女には手を出さない、むしろ、そういう変態から幼女を守るうって。自分は、性的欲望はあっても、実際に手を出す変態とは違うんだって、それが私の信念であり、ロリコンとしての誇りでした。私は、純粹無垢で素直な幼女に、惚れていたんです。まだまだ子供なんだけど、大人の世界のこともわかってる、精神的には大人という、そんな幼女が私のタイプでした。私にとって、ロリコン漫画は私の心の支えでした。生き甲斐でした。楽しみでした。だから、自分で守ろうとしたんですけど、駄目だったみたいです。デブゼロさん、私の代わりに、近藤先輩と一緒にロリコン漫画を守って下さい。託せるのはもう、二人しかいません。先輩って冷静に見えて、けっこう熱くなつて後先考えないで行動するところがあるんです。だから、デブゼロさんがサポートしてあげてください。二人なら、きっと規制を止められます。きつと……」

箕輪は気を失った。

「箕輪—————！」

河村は箕輪を抱きしめ、腹の底から叫び声を上げた。河村の頬に涙が流れた。

「箕輪君……………」

近藤の目にも涙が浮かんでいた。

「箕輪さん、お前の漫画に対する思い、しかと受け止めた。このゼ

口が、その願い、叶えて見せる！」

河村は箕輪を床に寝かせると、立ちあがった。

「面白い。俺たち原石軍団が相手になるぜ。どすけべ変態如きに、負けるかよ」

知多がガムをくちやくちやと噛みながら言った。

戦友を失った河村と近藤。二人は強い怒りを胸に、原石軍団に立ち向かおうとしていた。

第二十六章 託された思いを胸に

都知事室で、原石慎太郎はひとりテレビ画面の前に立っていた。

「残りは二人。これでは、とてもじゃないがここまで辿り着けないだろうな。利綿君や知多君、田倉君や田前先生が控えている。俺の出番はない。所詮はニートや正体不明の連中、番狂わせにはなったが、とうとう年貢の納め時というわけか」

「本当にそうか、原石」

サタンが疑問を口にした。

「お前は違うと言いたいようだな、サタン」

「そうだ。お前は少し、使命感に燃えた人間がときに見せる底力というものを、軽視しているようだ。ニートだろうが、使命感を信じて疑わない人間は脅威だ」

「さあ、どうかな？」

原石は顎をさすった。

河村は剣を構え、利綿と対峙した。

「利綿哲也！ お前は俺が倒す！ 戦友・箕輪晴子の仇だ！」

「大した自信だ。だが、それがただの驕りに過ぎないことを、今に思い知ることになる」

利綿が床を蹴り、刀を振り下ろす。河村は受け止め、払った。利綿は第二撃、第三撃を繰り出す。そのたびに河村は的確に受け止めた。

「言うだけのことはある。しかし」

利綿が刀を振り回し、河村の剣を巻き込んだ。河村の剣は河村の手を離れ、宙を舞った。

「しまった！」

「先ほどの女性と同じ手でやられるとはな。何を見ていたんだ？ その目は節穴か？」

利綿が斬撃を見舞った。河村は後ろへ飛んだ。

「非モテゼロ、何をしているのである！ CDを忘れたのか！ CDをかけるのである！ さすれば、自ずから勝機は見えてくるのである！」

近藤が大声を張り上げた。

「そ、そうか！ そうだったな！ サンキュー、春雄さん！」

河村はラジカセに急いで近付いた。

「だからあんたの相手は俺だって。二度も同じこと言わせんな」

知多が拳銃を撃つ。

「うぬぬぬぬ！」

近藤は弾道を読んで逃げ回るばかりであった。

曲が流れ始めた。

あんなに一緒だったのに

夕暮れは もう違う色

ありふれた優しさは

君を遠ざけるだけ

冷たく切り捨てた心は

さまようばかり

そんな格好悪さが

生きるといふことなら

寒空の下 目を閉じていよう

防戦一方で焦り気味だった近藤の顔に喜色満面となる。

「これは、See-Sawの『あんなに一緒だったのに』である！

ほおおおおおおおおおお！ アスランパワー！ アスランよ、春雄に力を分け与えてくれなのである！ はおおおおおおおおおおおお！

近藤は知多に突進していった。「あんなに一緒だったのに」はテレビアニメ『機動戦士ガンダムSEED』のエンディングテーマである。

「あんなに一緒だったのに」という歌詞は、河村に箕輪のことを思い起こさせた。とても短い間だったが、箕輪と過ごした時間が思い出されてならなかった。

——箕輪晴子です、よろしくお願いします。

——えっと、太めのゼロさんですね。

——非モテ太目ゼロさんのアイデア、うまくいきましたね

——ほんとですよ、非モテさん。名前は大事ですよ。もうちょっと考えてからつけた方がいいんじゃないですか

——長ったらしくて何が何やらわかりませんよ。もうさっきの、何でしたっけ、はいやあ何とかでいいんじゃないですか？

——太っちょゼロさん、ロリアニメのアニソン、何かないんですか！

——何でないんですか！ 普何枚かは持つてるもんでしょうが！

「俺も負けられねえぜ！ 箕輪よ！ 力を！ 俺に力を！ 箕輪——！ うおおおおおおおおおおお！」

河村は利綿に向かっていった。利綿は刀を振り下ろす。河村は動きを予想して、右へ走った。刀を振り下ろした利綿は隙だらけとなった。河村は飛んだ。

「はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

拳を放つと同時に掛け声も出した。拳は利綿の顎にヒットした。

「はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

河村は第二撃を利綿の喉に放った。利綿はその場に倒れた。

「利綿さん！ まさか！ あり得ないぜ！」

知多の両目が驚きで大きく見開かれた。知多の目は倒れた利綿に釘付けとなっていた。

「知多ひろし、貴方の相手はこの春雄である！」

近藤が知多に急接近していた。

「この糞餓鬼が！」

知多が引き金を引く。しかし、近藤は器用によけながら、知多に近付いた。

「なぜだ！ なぜ当たらない！」

「これがアスランパワーなのである！」

近藤が左手で知多の腕を掴み、銃口を自分から外した。

「どすこいである！」

近藤の張り手を食らい、知多は一メートル半ほど吹き飛ばされた。知多は失神していた。

「仇は取ったぜ、箕輪さん。俺たちを見守っていてくれ。おい、春雄さん、上へ昇るぞ」

河村は階段へと走っていった。近藤も後を追う。

第二十七章 自称真のエリートとの戦い

五階には、スーツ姿の中年男が二人、待っていた。

「やつとご登場か。待たせてくれるな、四銃士。うん？ 二人になっている。さすがにここまで来るのに、仲間を減らしてしまったようだな」

「誰だ、お前は！」

河村が大声で誰何した。

「そういきりたつな。安心しろ。すぐにお前たち二人もお仲間と同じにしてやる」

「だから誰だつてんだよ！」

「犯罪者に名乗る名など、あいにく持ち合わせていない」

スーツ姿の男は取り合わない。

「何を！」

「この男、ネットで顔を見たことがあるのである。田倉潤。東京都青少年治安対策本部長である。警察庁から出向している警察官僚なのである」

近藤が眉間にしわを寄せて言った。

「なに、警察官僚だつて！」

河村は驚いている。

「私のことを知っていたか、近藤春雄君。さすがはネットで規制反対運動をする活動家といったところか。しかし、今回ばかりは相手が悪すぎた。五年前のように、規制を潰すことはできない。お前たち二人はここで我々に倒され、無様な醜態をさらし、床を這うことになる」

「春雄のことも調査済みというわけか。非モテゼロ、この男は危険なおいがするのである。気を引き締めてかかるのである」

「ちよつとちよつと、私にも話させてにや」

田倉の隣に居た眼鏡中年男が口を開いた。

「こいつは誰なんだ、春雄さん」

「この眼鏡は、田前雅英、刑法学者で首都大学東京の教授をしているのである」

「私のことを知っているにやか。それは光栄だにや。君たちは、どうして原石都知事が進める条例改正案に反対するにや？」

「もちろん、漫画を守るためさ。俺はアニメが好きだ。漫画はよくアニメ化されることがある。もし漫画が規制されれば、アニメ化にも悪影響を及ぼすかもしれない。俺はそんなのは許さねえ。だからここにやってきた。都知事を倒すためにな。……漫画のために、もう何人もの仲間が倒れていった。俺は奴らに誓ったんだ。」

必ず規制を阻止し、漫画を守って見せると。その仲間のために、俺は今、ここにいます」

河村が当然と言う顔で答えた。

「右に同じくである。この改正案の成立を許せば、芸術的漫画がすべて、東京から消え去ってしまうのである。東京から漫画の火を消させてたまるかなのである」

厳しい顔つきで近藤も返答した。

「下らんじゃ。まったくもって下らん答えじゃ」

田前はあからさまに小馬鹿にした様子で言い放った。

「何だと！」

河村が顔色を変えた。

「原石都知事を誰だと思っているじゃ？ 都知事は一流難関大学の橋一大学を出て、大学生で芥川賞をとった天才じゃ。国会議員も何年も務めたじゃ。大臣も経験してるじゃ」

「何が言いたい？」

「君ら低レベルで無教養で不勉強で無知蒙昧の愚民どもは、ただただ優秀な人間である原石慎太郎都知事を信任していればいいのじゃ。それなのに、都知事に刃向かうなど、もってのほかじゃ。身の程知らずもいいところにじゃ。いいかにゃ？ この世界は、エリートが統治しているじゃ。政治家、官僚、学者が統治者にゃ。君ら愚鈍な迷

える子羊たちは、私たちのいいなりになっていればいいのにや。劣等は優等に黙って従うべきなのにな。そうすれば、家畜でも、それなりの生活が送れるにな」

「てめえ、なんつうこと言いやがる！ 頭のおかしな学者だぜ！」

河村は激昂していた。

「何を言うか。田前先生のおっしゃるとおりではないか。愚劣な民に世界をどうにかできるか？ 否だ。優秀な者がこの世を治めるべきだ。劣等種に任せていたら、世界は破滅に向かってしまう。お前たちが目の敵にする規制とて、お前たち愚劣民どもが間違いを犯さないようにするための目的のもの。漫画規制がなければ、お前たちは漫画の読み過ぎでおかしくなり、犯罪を犯すに決まっているのだ。それを我々優等種が救ってやろうと言うのに、何が不満なんだ？ なぜ反対する？ まったく、愚劣愚昧な人間の言うことは、理解に苦しむな」

「こいつもム力つく野郎だ！ あつたまくるぜ！」

「すぐ怒るのは、お前が劣等種である証拠に過ぎない。最後に一つだけ聞いておく」

「なんだよ！」

「大人しく縛につくつもりはないか？ それがお前たちのためだ。お前たちはどうしようもなく、救い難い愚者だが、それでも我々は慈悲の心で憐れみを与えてやろうというのだ。どうだ、悪い話ではないだろう？」

「馬鹿言え。誰が捕まるかよ！ 俺たちはな、お前らイカレポンチを倒し、規制をぶっ潰して、漫画を救ったヒーローになるんだよ！」

「そうか。馬鹿は死ななきゃ治らんようだな。交渉決裂。田前先生、愚かな犯罪者どもに、我々真のエリートの手を見せてやりましょう」

田倉がスーツの内ポケットから何か取り出した。田倉が白いものを飛ばす。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

河村は飛んできた白い物体を剣で叩き落した。

「なんだこりゃ」

河村は白いものをしげしげと見つめた。

「これは……名刺、か？」

「そうだ。名刺だ。私は名刺飛ばしの達人なのだ」

田倉は次々と名刺入れから名刺を手にとり、河村たちに飛ばしていく。

「なめやがって！ 何だこの攻撃は！」

河村は名刺を叩き落しながら、田倉に近付いていく。

「にゃあー！」

河村の耳に、猫の鳴き声が届いた。

（なんだ？ またさっきの眼鏡学者がにゃあって言っているのか？）

河村はちらりと鳴き声の方向を見た。

「なに！」

猫、猫、猫。そこら中いたところが猫だらけとなっていた。

「どうなってんだ、春雄さん」

「わからんのである」

近藤も困惑していた。

「にゃあーはっはっはっはっ、にゃあーはっはっはっはっはっはっ」

田前が独特の笑い声で大笑いしている。

「私は猫を呼び寄せ、自在に操ることができるのにゃ。猫は愛らしい動物にゃ。襲われたとしても、猫に攻撃を仕掛けることはできないはずにゃ。君らは、一方的に猫から攻撃を受け、倒されるのにゃ。にゃあーはっはっはっはっはっはっ。かかれ、猫たちよにゃ」

田前の号令一下、猫たちが河村と近藤に襲いかかった。

「にゃあーはっはっはっはっはっ、終わりにゃ。あっけなかったにゃ。にゃあーはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ」

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村は猫を剣で斬り伏せていた。

「な、なんだとにや！？」

「ほおおおおおおおおおおおおおおお！」

近藤も猫に張り手を食らわしていた。

「な、なぜにや！？ どうして猫に攻撃を仕掛けられるにや！？」

「わりいな、俺は犬派なんだよ。はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村はまたも猫を斬り捨てた。剣を振るうたびに、猫が悲鳴を上げて床に転がった。

「春雄は小動物に愛情はないのである。はおおおおおおおおおおおおおお！」

近藤も猫に張り手を送り、猫を壁や床に叩きつけたりしていた。

「ば、馬鹿にや！ 猫を平然と攻撃することができる人間がいるにやと

！ こんなことが！ こんなことが！ あり得ないにや。あり得ないにや」

呆然自失となった田前に、河村が迫った。

「田前先生！」

田倉が呼びかけたが、田前はうわ言のようにぶつぶつ言うだけであった。

「はいやあたたたたたほわちゃあちよー！」

河村の拳が田前の顔面にめり込んだ。田前の眼鏡は割れてひびが入った。悲鳴を上げることもなく、田前は倒れた。

第二十八章 春雄の涙

田倉は横たわる田前を見つめていた。

「可愛らしい猫に危害を加えるとは。目的のためには容赦なしか。犯罪者らしい行動だ。感心するよ」

田倉が皮肉まじりに言った。

「降りかかる火の粉は払わねばならないのである」

近藤が田倉に向き合う。

「おや？ もう名刺入れに名刺がないようだ。どうしたものだろうか？」

田倉が途方に暮れた顔をする。

「観念するのである！」

近藤が田倉に向かって走り寄っていく。

「なんてな」

近藤と田倉の距離が数歩しかなくなったとき、田倉のスーツの右手の袖から棒が現れた。田倉は棒で近藤に殴りかかる。

「春雄さん！」

河村が大声を出す。

「心配無用である！」

近藤が警棒を左手で掴んだ。

「こんな棒きれにやられる春雄ではないのである！」

「馬鹿め」

田倉がほくそ笑み、棒の取っ手を親指で押した。

「うわあああああああああああ！」

近藤が悲鳴を上げる。近藤の体に電流が流れたのだ。近藤は背中から倒れた。

「春雄さん！」

河村が近藤に駆け寄り、抱き起こす。

「これは警察関係者の天下り企業につくつてもらった特注品でな。電流が流れる特殊警棒なのだ。……近藤春雄、お前もここまでだ。所詮お前は二ートに過ぎない。東大卒のエリート官僚である私を本気で倒せると思っていたのか？　勝てるわけがないだろう？」

私はこの国を動かす真のエリートだ。社会の最底辺に位置しているお前から二ート如きに、後れをとるはずがない。そんなことは、天が落ちても起こり得ない。クズでしかないお前たちが、この日本の最高学府を出た私に相手にしてもらえただけでも、ありがたく思え。はーはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！」

「春雄さん、大丈夫か？」

河村が近藤に顔を近づけて聞いた。近藤は顔をしかめながらも、口を開いた。

「うう……もう、駄目なのである。体が痺れて、言つことを聞かないのである。悔しいのである！　ここまできて……。口惜しくしょうがないのである！　む、無念なのである」

近藤の両目から涙があふれた。

「春雄は、漫画を守りたかったのである。春雄は、男の子が、美少年が好きだったのである。春雄は小さい頃から、どうも女性や女の子は苦手だったのである。女性のちゃらちゃらしたところ、なんか狙いすましたところがどうにも好きになれなかったのである。そんなとき、春雄は出会ったのである。運命的な出会いといえたのである。美しすぎる男の子との出会いは、春雄を変えたのである。男子は、無垢な心を持ち、ずる賢く演技をする女子とは全く異なる存在だったのである。幼な顔の小さな男の子でも、既に大人の男らしさを兼ね備えた存在だったのである。春雄は、その容姿を純粋に可愛いと思い、その精神に惚れに惚れたのである」

「ただの変態小児性愛者だろう。何をよまいごとを」

田倉は冷笑を浮かべ、吐き捨てた。

「てめえは黙ってる！ それで？」

河村は近藤に先を促した。

「春雄は、シヨタコンとなったのである。シヨタものは何でも買いあさったのである。春雄は特にシヨタ系の漫画が気に入ったのである。小説は読むのに時間がかかったりするが、漫画は割と時間をかけずにすぐに読み終えることができ、その点でお手軽だからなのである。春雄はシヨタ漫画の愛好家となったのである。春雄は、春雄は、シヨタ漫画が大好きだったのである。シヨタ漫画は、春雄の大切なエンターテイメントなのであり、嫌なことを忘れさせ、春雄に元気を与えてくれる宝物だったのである。シヨタ漫画は春雄のすべてと言つてよかったのである。だからこそ、春雄は、シヨタ漫画を守ると決意を固めたのである。犯罪に手を染めることになったとしても、シヨタ漫画を守り抜くと、心に決めたのである。だがしかし、田倉の言うとおり、春雄ももはやこれまでなのである。非モテデブゼロ、いや、ゼロ、春雄の代わりに、倒れていった痩せゼロや箕輪君の代わりに、原石慎太郎の規制を完膚なきまでに叩き潰し、漫画を守って欲しいのである！ 貴方はもう非モテデブゼロではない、ゼロなのである！ ゼロ、お願いである！ 頼むのである！ ゼロ！ 救世主ゼロ！ 漫画を救えなのである！ 残されたのは、もう貴方しかないのである！ 春雄の切なる願い、叶えて欲しいのであ……」

近藤はこと切れた。気を失ったのである。近藤の頬は涙で濡れていた。

「春雄……………」

河村は近藤を抱いて絶叫した。河村もまた頬に涙を流していた。

「春雄さん、お前の願い、必ず聞き届けてやるぜ。絶対だ。約束するよ」

河村はすつと立ち上がる。

「まったく、お前たちはとんだ臭い三文芝居を見せてくれるな。退屈で死にそうだ。近藤春雄なんて男は、ただの男の子が好きな変態ニート犯罪者ではないか。失笑ものだ。もう笑うしかない。いかにいきがろうが、ニートはニート、変態は変態に過ぎないのだ。近藤など、何のとりえもない、社会に適応できないゴミクズカスクソに過ぎんだ。その点、私は違う。私はこの改正案を成立させ、警察庁に戻り、出世コースをまっしぐら、いずれは長官となるのだ。退任後は天下り企業がごまんと控えている。お前らゴミクズクソカスどもとは違うんだ」

「言いたいことはそれだけか？」

河村が剣を構えた。

「何？」

「お前は俺をマジギレさせちまった。覚悟はいいかって言ってんだ！」

「お前如きに何ができる？ この特殊警棒に触れれば、感電するのだぞ？ お前にこれを防ぐ手立てはない」

「うるせえ！」

河村は田倉目掛けて走っていった。

第二十九章 僕は、鳥になる。

「田倉！ お前の首はこの俺が貰い受ける！ 春雄さんの弔い合戦だ！」

河村が大きく剣をふりかぶり、振り下ろす。田倉は一步後退する。その顔には、見る者を凍りつかせるような冷笑が浮かんでいた。

「お前如き犯罪者ふぜいが私を倒すだと？ 馬鹿な。私は棒術に關しても達人だ。東大卒のエリート高級官僚の私にできないことはないのだ。お前のような犯罪者を捻り潰し、捕縛することなどお茶の子さいさいだ。ふおおおおおおおおおおおお！」

田倉が警棒で河村に襲いかかった。右に左に警棒を一閃させる。今度は河村が退く番であった。

「くそっ！」

河村の顔に悔しさがにじむ。

「さっきの威勢はどこにいった？ 私を倒すのだろう？ できるものなら、倒して見せろ！ さあ！ 威勢がいいのは口だけか！ はーはっはっはっはっはっはっはっ！」

田倉は警棒を振り回して、河村への間合いを詰めていく。河村はなすすべもなく後ろへ下がるばかりであった。

「お前には何もできん。お前は何を持つてる？ お前には何がある？ お前は無力だ。お前は無能だ。お前は無知だ。お前には何もな

[illegible]

「くっ！ はっ！ ラジカセ、ラジカセだ！」

When I just can't find my way

When I am out of my way

When I just can't find my way

河村と田倉の距離は縮まった。河村は剣を投げた。田倉は警棒で叩き落す。

I n m y d a r k n e s s d r e a m s

I h e a r y o u c a l l m e

Y o u g i v e m e t h e r e a s o n t o l i v e

I n m y d i r t y h e a r t

I h e a r y o u c a l l m e

A n d y o u r e a c h o u t t o c a r r y m e
a w a y

N o o n e c a n s a v e m y s o u l

O n l y y o u

次の瞬間、河村は田倉の眼前にいた。

「いつの間に！　だが！」

田倉は警棒を突き出した。河村は体をひねって回避した。河村は拳を握りしめ、今まさに繰り出そうとした。

「春雄さんの仇！　田倉ー！　お前は俺には何もなかったが、それは間違いだ！　俺には同じ志を持った仲間たちがいるんだよ！」

「この私が、こんなデブ男に倒される！？　東大卒、キャリア官僚のこの私が！？　警察庁長官になり、天下りウハウハの夢が！？」

「はいやあたたたたたほわちゃあちょー！」

河村の拳が田倉の顔面を直撃した。田倉は倒れた。

「春雄さん、仇はとった。痩せゼロ、箕輪さん、春雄さん、俺を守ってくれ」

河村は六階へと続く階段を上っていった。

第三十章 側近の裏切り

原石は都知事室を退出していくとき、瀬猪が言った台詞を思い出していた。瀬猪は往年の「革命闘士の制服」を着ていた。ヘルメットにサングラスにマスクという服装である。

「ご安心を。もし、私の下の階の人が倒されたとしても、六階には私がおります。不肖この瀬猪直樹、学生時代は州信大学全共闘書記長として鳴らした猛者。革命の闘士として、あんな連中に負けは致しません。どうかご安心ください。私がちゃっちゃと倒してご覧に入れましょう」

（残すは瀬猪君ばかりとなってしまうた。瀬猪君ならば、あの仮面の男を倒してくれるかもしれん。しかし）

「この仮面の男はいったい何者なのだ？」

原石は知らず知らずのうちにひとりごちていた。

「河村英樹。ニートだ」

サタンが教える。

「ニートだと？　またしてもニートか！　ニート！　ニート！　ニート！　どうしてニートばかりが俺を襲う！？　俺はあのとき、ニートのためにも戦ったと言っのに！」

原石は二月に起こった霊能力者・超能力者、輪美明宏による大阪城占拠および日本全国ニートゾンビ化事件において、大阪城に赴き輪美一党と剣を交えていた。

原石の脳裏に輪美の台詞が蘇る。

「働かざる者食うべからず、働かざる者生きるべからず、じゃ。余は怠け者は好かぬ。ニートなど、何の役にもたたぬただの穀潰しに過ぎん」

「輪美の言うとおりだ。ニートなんぞ、社会の穀潰し。俺はそんなものために命がけで戦い、その結果がこのざまか！　あのとき、ニートなど助けなければよかったのか？　しかし、ああしなければ、日本は輪美の支配下に置かれてしまっていた。あれしか手はなかったはずだ。くそっ！　ニート如きが俺の邪魔をするか！」

「落ちつけ、原石。取り込んでいるところ悪いが、さらに悪い知ら

せがある」

「悪い知らせ？」

「瀬猪はお前のために戦ってはくれないようだ」

「何！？」

原石の顔が驚きに包まれた。

河村は六階に行くべく階段を上っていた。そこへ、おかしな格好の人物が現れた。ヘルメットにサングラス、マスクをつけた人物であつた。

（なんだこいつ。なんでこんな恰好してんだ？）

その人物はそそくさと階段を降りて行ってしまった。

（まあいいや）

河村は六階に到着した。不思議なことに、いるはずの敵が存在しなかった。

（おかしいな。どうなってんだ？ まさか、さっきの奴が）

河村は急いで先ほどの人物を追いかけてようとして、やめにした。

（逃げたら逃げたでいいや。戦闘を回避できたわけだし、もうけも

のだぜ。あいつかどうかかんねえしな)

河村はまたも階段を上った。

「おのれ瀬猪！ 副知事にしてやった恩を仇で返しやがった！ 恩知らずめ！ 裏切り者め！」

原石は机に置いてあるものをすべて乱暴に床に落とした。

「原石、だから落ちつけと言っているだろう。もうすぐ河村が来る。そんな精神状態で奴と戦うつもりか？ 冷静になれ」

「くそっ！」

原石ははあはあと荒い息をしていた。

七階に着いた。河村は迷わず都知事室のドアを開いた。河村の目に、原石の姿が飛びこんできた。原石は左手に日本刀を持っていた。

「原石慎太郎！ 俺はゼロ！ 平成世直し救世主仮面ゼロ！ 漫画を守るという友との約束のため、お前を倒しにここにやってきた！ 覚悟しやがれ原石！ こっちはお前の手下との戦いで仲間を三人も倒されたんだ！ みんなそれぞれ、漫画に対する思いを持っている！ 愛を持っていた！ みんな、ただ漫画を守りたいと言う一心で戦っていた！ 俺はそれを知っている！ 俺は倒れた仲間から思

いを、愛を、託されたんだ！ 俺はそれを裏切らない！ 俺はお前をぶちのめし、この戦いを終わらせる！ 漫画規制など、この俺がいる限り、絶対にさせない！ 俺は漫画と友との約束を守る！」

「犯罪者の癖に、饒舌だな。いや、だからか。悪事を働く者は、自分の行いを正当化しようと躍起になるものだ。ゼロよ。いや、二ー
ト、河村英樹」

「なぜ俺の名を！？」

「俺をなめるな。都知事だぜ？ 東京のことで、俺にわからないことはない。……しかし、よくここまで来れたな。正直、驚いている。二ートなどに俺の息子や友達が倒されるとは。意外だ。俺も長いこと生きてきた。俺はいろいろな経験してきている。たいていのことは驚かない俺だがこの年になっても、驚かされることはあるんだな。……河村、この期に及んでもわからないことがある。どうしてお前は、お前らは、俺が進める規制に反対する？」

俺は小さな子供をセックスの対象にする漫画が許せないだけだ。子供を生の対象に見ることは、悪だろう？ それを正して何が悪いんだ？ 俺にはとんとわからないな。誰がどう見ても、子供とセックスする漫画を読む奴は、ど変態だ。あんなものを読む奴はもともとどこかおかしいし、読めば読むほどおかしくなっていくに違いない。しまいには子供を犯すだろう。あの手の漫画は犯罪を助長しているんだ。俺はそれを防ぎたい。これは都知事としての責任だ」

「黙れ原石！ お前はエロ漫画を読む人間の気持ちをまるでわかっていない！」

「エロ漫画を読む人間の気持ち？ なんだそりゃあ」

原石は理解できず啞然としている。

「ロリコンやショタコンは、なりたくてそうなったわけではないんだ！ ロリコンもショタコンも、自分がそうであることについて、葛藤している！ 苦しんでいる！ 彼らはそういう趣味をもっているだけで、犯罪を犯すわけではない！ それを原石、お前は犯罪を犯すものだと決めつけている！ お前はまるで彼らを理解していない！ 頭からど変態と決めつけ、理解しようとしなさい！ お前は人を犯罪者というレッテルを貼り、表現の自由を侵害するファシストなのだ！」

「アホらしい。変態のことなど、わかりたくもない。今回お前らが犯した犯罪なんぞは、新聞の一面にも載らん。三面記事がいいところだな。都民はお前らのことなど、三日もすれば全部忘れてるわ。つまらんことをしたな」

原石は侮蔑の笑みを浮かべた。

「黙れ原石！ お前に俺や俺の仲間を嘲笑う資格はない！ 原石慎太郎！ 四銃士の最後の一人である俺が、お前に引導を渡してやる！ うおおおおおおおおお！」

河村は原石目掛けて走った。

第三十一章 秘剣・肝臓突き

河村は原石の頭を狙って剣を振り下ろす。

キン。

原石は音もなく日本刀を抜き、受け止めた。二人は即座に鏢を迫り合った。

「おら！」

原石が強い力で唾を押す。

「うお！」

河村は後退を余儀なくされた。

「悪いな河村。俺はさっきニンニク卵黄ゼリーを食っちゃったんだ」

「それが何だってんだ？」

河村は合点がいかない。

「鬼に金棒ってことさ。俺はニンニク卵黄を得ることで、力を上昇させることができるのだ」

「マジかよ」

河村は半信半疑だ。

「マジさ」

一瞬で原石の姿が河村の眼前へと移動していた。

「！」

原石が刀を横へ薙ぐ。

「うおおおおおおお！」

河村は何とか受け止めた。

「それで防いだつもりか？ おら！」

原石の左足が河村の側頭部を蹴った。

「おお！？ クソつたれ！」

東京都副知事・瀬猪は急いで階段を降りていた。既に三階である。

（あと少しだ。あと少しでここともおさらば。………原石なんかのために命を張るなんて、馬鹿げてる。私はあの爺さんと違って、忍者じゃないんだ。斬った張ったなんかできるかよ。………
・よし。もう二階だ）

瀬猪が二階の階段へさしかかったとき、ひとりの女が立ちふさが

った。

「おかしな服装でどこへ行くんですかね」

（なんだこの女は。今急いでるって言うのに。適当にごまかして先に行かないと）

「すみません、私都庁の清掃をしている者なんですけど、うっかり道具を忘れてしまいました。今取りに戻っているところなんです」

「へー。なるほどね。……そんなんで、私が騙されると思いますか、瀬猪副知事」

（なぜばれた？ 完璧な変装のはずだ。まあここはとぼけて押し通ろう）

「まさか、私は副知事なんて大した者じゃございません。急いでいるので、通らせてもらいますよ」

瀬猪は女の横を通り過ぎようとした。

「あんたが昔、全共闘の革命家だってことは調査済みなんだよ。その格好ですぐピンときた。私のことを見忘れてるのがちよつとショックだけど、まあいいか」

（そういえば、この女、どこかで？）

「どこかでお会いしましたでしょうか？」

振り返った瀬猪の首筋に銀食器のナイフの取っ手が突き刺さる。

瀬猪は階段を転がり落ちていった。

「河村はどうしただろう？　しっかり都知事を倒せてればいいんだけど」

女は瀬猪に目もくれず、階段を駆け上がり始めた。

「くそ！」

河村は何回か目の原石の斬撃を受け止めた。

「原石忍群総帥の俺の攻撃を何度も受けるとは、河村、お前は本当に大した野郎だ。だが、お遊びもこれで終わりだ。本気を出させてもらうぜ」

「何を！」

河村が原石の喉を目掛けて突きを放つ。しかし、原石は眼前から消えてしまった。

「なぬ！」

河村は仰天してしまった。

「こつちだ」

河村の背後から原石の声がした。河村が慌てて振り向く。

「おら！」

原石は河村の両手首をしたたかに打った。

「う、おおおう！」

河村が悲鳴を上げ、剣を手から落とす。

「そらそら！ 隙だらけだぞ！ やる気あんのかお前！ 俺を倒すんだろ！ 倒してみせろ！」

原石が続けざまに斬撃を送ってきた。河村はただ回避するだけである。

そのとき、ドアが大きく開かれた。

「河村、何やってる！ CDだ！ CDをかける！」

枢やなが立っていた。

「おおそつだ！」

河村は急ぎ足でラジカセのもとへ向かった。しかし、手首が痛くてリュックからCDを取り出すことができない。

「お前はCDを聞くとパワーアップするんだっとな」

原石の手から、棒手裏剣が放たれた。棒手裏剣は無情にもラジカセに突き刺さった。

「うおおあああああああ！ 三千五百円のラジカセが！」

河村が悲痛な叫び声を上げた。

「危ない危ない。これでCDパワーは出ない。勝負あつたな、河村」

原石はにやりと笑った。

「私が壊したのは三千円のものだったよな。五百円奮発して新しいのを買ったのか」

枢が原石に対峙しながら呟いた。

「漫画家先生どうした？ 今度はあんたも俺に反旗を翻すってか？」

「ええ。ちょっと気が变っちゃいましてね、都知事。私も漫画家のはしくれなもので」

枢の両手から銀食器が飛ぶ。原石は走ってよけながら、飛来した銀食器を叩き落す。

原石は間合いを詰めようと枢に近寄り、枢は間合いにはいられないように駆ける。

「河村、何やってんだ！ あんたも戦えよ！」

「痛くて剣がもてねえんだよ」

「気合だ！ 気合で持て！」

「隙あり！」

原石が飛翔して枢の頭に刀を振り下ろす。枢は銀食器で受けた。

「今だ、河村！」

枢が河村を促す。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

河村は激痛をこらえて剣を握り、原石に走り寄った。

「なに！」

原石の両目が大きく見開かれた。

河村は坂本真綾とのチャンバラレッスンを思い出していた。

「いいか河村。突くときは肝臓を狙え。肝臓は弱点だ。ここを突くと数秒で死に至ると言われている。これはかなりの急所だ。覚えておくように」

「原石――――！！　　これでも食らえ！　秘剣・
肝臓突き！」

河村は剣を原石の肝臓に突き立てた。

第三十二章 河村英樹の二トパワー

「ぐおおおおおおおおお！」

原石が顔を歪ませ、うめき声を上げた。

原石の腹に河村の剣が突き刺さるさまを見て、

「やったか！？」

枢が思わず漏らす。

「なんてな」

原石ががらあきの枢の腹を力の限り蹴り飛ばす。

「うぬっ！」

枢が悲鳴を上げて蹴飛ばされ、壁に背中を叩きつけられる。原石は河村の剣を刀で払い、河村の右肩を打った。

「いで！ な、なぜだ！？」

河村が再び剣を落とし、驚きの声を出す。

「残念だったな、河村。俺はワイシャツの下に頑丈な鎖帷子を着こんでいたのだ。お前の剣など、効かんわ」

「くそ！」

河村が床を拳で叩く。

「ケリはついたな。俺の勝ちだ。そもそも、所詮大義もなく、自分たちのすけべ感情に突き動かされていただけのお前らに、戦いの神が微笑むはずがない。俺のもとには、規制を支持する署名が四万五千筆も届いている。都民は俺の味方なんだよ。お前、俺に言ったな。俺たちの漫画愛好家魂をなめるなよ、と。漫画だと？ 漫画は所詮漫画に過ぎんだ。漫画など、俺に言わせれば子供だましの戯画だ。あんな落書きのために犯罪までやってのけるお前らが信じられんよ。漫画の読み過ぎで頭がおかしくなったとは思えんな。この点からいっても、俺の規制はまっとうであると言っことができるだろう。お前らのことは、規制反対派が狂人だと触れて回る宣伝材料として利用させてもらう。さて、話は終わりだ。俺の城で暴れまわったお前らに、俺がたんまりとお灸をすえてやるぜ。感謝しろ」

原石が河村に近寄っていく。

「駄目なのか？ 俺では無理なのか？ 俺はみんなの約束を果たせないのか？」

河村は俯いている。河村の脳裏に痩せゼロ、箕輪晴子、近藤春雄の言葉が浮かぶ。

「必ず成し遂げろ。きつとだぞ？」

「デブゼロさん、私の代わりに、近藤先輩と一緒にロリコン漫画を守って下さい」

「ゼロ！ 救世主ゼロ！ 漫画を救えなのである！ 残されたのは、もう貴方しかないのである！ 春雄の切なる願い、叶えて欲しいのであ……」

「みんな、すまねえ。約束、守れなかった。う、うう……」

河村の両目から涙が滝のように流れ落ちた。

「河村、まだあきらめるな！ シュトリ様、見ているんだろう？ お助けを！」

枢が声を張り上げた。シュトリはかつて枢と契約を結んでいた悪魔であったが、枢から離れていった。

「お前は負けたんだ。じたばたせずに潔くしろ。それとも何か、ラジカセが無事でCDが聞ければ、俺に勝てたとしても？ がーはっはっはっはっは、おかしくてしょうがねえな。ニート如きに俺がやられるかよ。この社会のクズが。穀潰しが。働ける癖に働かないニートはただの墮落した怠け者だ。お前らニートは社会に適應できない不良品・欠陥品だ。クズ・穀潰し・怠け者・社会不適合者・不良品・欠陥品なんぞに、この原石慎太郎がやられてたまるかよ」

「くっそー！ ラジカセさえ！ CDさえあれば！」

河村の心の底からの悲鳴が都知事室を駆け廻った。

「ほう。それらさえあれば勝てると言っのか？ 面白い、俺に余興を見せてみる」

突然、河村の耳に傲慢な男の言葉が聞こえてきた。

「だ、誰だ！」

河村の顔が上を向いた。

「シュトリ様！ シュトリ様なのですね！」

枢の声が上ずっている。

「シュトリ？ あんな奴と間違えるな。奴よりは俺はかなり上位の者だ。俺はサタン。俺を信奉する人間どもには魔王陛下と呼ばれている」

「サタン、何をするつもりだ？ 邪魔だてするな。こいつらは俺が痛めつけてやるんだ。俺の楽しみを奪うのか」

「俺の傍に居る男がどうにもうるさくてな。さっきから河村に協力しろと言ってくる」

「お前の心、確かに俺には届いたぜ、河村英樹」

若い男と思われる者の声が河村、原石、枢の耳に届いた。

朝も夜も パソコンの前
カスになるよ ダメな僕 働かない世間知らず
「恥さらし」と 罵られても 部屋を出ない ダメな僕
今逝くよ 僕は甲斐性ナシ

「これは！」

「知っているようだな。よかったぜ。痴音ミクが歌う『or z』だ。
俺も生きてた頃はニートでな。この曲には元気をもらったぜ」

「or z」はテレビアニメ「コードギアス 反逆のルルーシュ R
2」のオープニングテーマ「O2」の替え歌である。

「うおおおおおおおおおおおお！ 力が！ 力が漲
る！ これはニートパワー！ ニートとしての潜在力が『or z』
を聞くことによって今、覚醒されている！ うおおおおおおお
おおおおお！」

河村は剣を握り、飛びあがった。

社会で嫌われても 何も学べないヤツがいる
彼女が出来なくても 守るべきものが僕らにはある
何MB？ 何GB？ 容量 どれだけあっても足りない
疼きだす邪気眼 鳴りひびく電波ソング
崩れた顔で 部屋こもる 垢だらけの手で 親泣かす

落下すると同時に河村は原石に斬りつけた。原石は刀で受けた。二人は激しい鍔迫り合いを演じた。

「原石、お前は漫画を見下しているようだが、それが戦中派であるお前の限界なのだ！」

「なに？」

「お前は日本最高の文化・芸術へと昇華した漫画をいつまで経つても評価できない、時代に取り残された哀れな老人だ！ 漫画のよさがわからないとは、ほんとにかわいそうな爺さんだ！ 同情するよ」

河村は激しく斬りかかる。原石は懸命に打ち合った。

「お前のような二ートに同情される覚えはない」

「原石、そうやって二ートを馬鹿にしているようだが、お前の様な二ートに無理解な爺さんが政治家をやっているから、二ートは社会に理解されないのだ。俺は二ートのためにも、漫画のためにも、お前を打ち倒す！」

河村は剣を原石になげつけた。原石は剣をすぐさま払い落とす。

稼ぎも無い わがままの果てに 手にしたのは 絶望の未来 知らず知らず忘れてゆく 会話のノウハウも 今や何処に？

どう生きるの？ 親の目から見たら 俺の姿 惨めだろ

「もう終わりだね」と あの日悟った 部屋の中で泣いていた

「！」

原石の目の前に河村は立っていた。河村の腕が動く。

「俺がニートに！？ これは何かの間違いだ」

「原石ーーーーー！ 今度こそ！ これが痩せゼロ、箕輪さん、春雄さんの思いだ！ ニートをなめるな！ はいやあたたたたたほわちやあちよー！」

河村の拳が原石の左頬にヒットした。

「じふっ！」

原石の体が吹き飛び、壁に激突した。

最終章 東京リアル図書館戦争

「やったね、河村！ ついに原石都知事を倒した！ 私は、あんたならやってくれるものと信じていたよ」

枢は喜色満面である。

「おっしゃー！ やってやったぜ！ うおおおおおおおおお！
お！」

河村が天井を見上げて勝利の雄たけびを上げる。

「これで勝ったつもりか？」

原石が呟いた。

「何を！」

河村が原石を睨む。

「俺の背後には、大勢規制賛成派が控えている。俺ひとり倒したところで、それで何になる？ この戦いで確かにお前らは勝利をおさめた。だが、これで終わりではない。所詮は一時凌ぎに過ぎん。いや、それにすらならないかもしれない。これから漫画規制を推進する人間は現れ続けるだろう。そのたびにお前たちは、今度のように勝ちを手にして、漫画を守り通すことができるのか？」

「下らねえ規制野郎どもなんて、俺が何度でもぶっ倒してやるぜ」

「そうか。お前たちがどこまで信念を貫くことができるのか、後先短い人生だが、見物させてもらう」

原石は失神した。

河村は壊れたラジカセを手にとった。

「また壊されちゃったぜ。あーあー」

枢がぽんと河村の肩を叩く。

「気にすんなよ。また買えばいい」

「そんな簡単に言ってくれるな。俺はお前に壊された先代のラジカセも大事にとつてあるんだ」

「へー。何で？」

「俺の頭に思い出があるからさ。その記憶ある限り、捨てるに捨てられねえぜ」

「意外。感傷的なところもあるんだね」

「ほっとけ」

河村と枢は都知事室を後にした。

五階に着くと、河村は近藤を起こそうと揺さぶった。

「駄目だ。春雄さん全然起きねえ。どうするよ？」

「放っておくわけにはいかないよ。担げば？」

河村は近藤の右腕を自分の肩に担いだ。

「春雄さん重てえ」

「どれ。二人で運ぼう」

枢が肩を貸す。二人は近藤をかつぎながら歩いた。

「あれ？ デブゼロさんどうしたんですか？ 今加勢しようとしてたところなのに」

二人は五階から四階に続く階段で箕輪と出会った。

「原石なら俺が倒した。箕輪さんの願い、叶えてやったぜ」

「本当ですか？ やったー！ やりましたね！ これで漫画は守られる！ やっほー！ デブゼロさん、ありがとうございます！ またやっちゃいましたよ箕輪晴子。今度は漫画の危機を救うのに協力しちゃいました。きゃー！」

箕輪は嬉しさのあまりジャンプして見せた。

「箕輪さん、飛んではかりいなくて、春雄さん何とかしてくれ。重

くてさあ」

「あ、はい。先輩はどこをどうやられたんですか？」

「電流食らっちゃってな」

「それはまた。こういうときは、こうするんです」

箕輪が近藤の両肩にチョップを加えた。

「う！」

近藤がうめき声を上げ、目を開けた。

「ほらね。気づきましたよ」

「春雄さん、大丈夫か」

河村が近藤に声をかける。

「原石は？　原石はどうした！？」

近藤が河村に掴みかかった。

「ちゃんと俺がやったよ」

「そうか。やってくれたか。おおおおおおおお！　春雄、ここ数年でこれほど嬉しいことはないのである！　生きて良かったのである。おおおおおおおおおお！　」

近藤が泣き崩れた。嬉し泣きである。

「おいよせよ、春雄さん」

四人は肩を並べて歩き出した。

三階では痩せゼロがまだかまだかと河村たちを待っていた。

「成し遂げたようだな」

河村たちの姿を認めるなり、痩せゼロが言った。

「ああ。男の約束だからな。守るに決まってるだろ？」

河村が親指を立てて見せた。

痩せゼロは弾をもろに食らった所為で、ろくに歩けない。河村と近藤が肩を貸すこととなった。

二階に着いたところで、河村が口を開いた。

「みんなには俺の名刺渡しとく。何かあったら、連絡くれよ。また会いたいし」

河村はパソコンのメールアドレス、携帯電話の番号とメールアドレスが載った名刺を四人に手渡した。

「あ、それなら、私の連絡先教えときますよ。書くんで名刺貸して下さい。あと、ペンも」

「春雄でもある」

「私も教えといてやるかね」

「仕方ない。私も書くとするか」

四人は河村の名刺に自分の連絡先を書き込んだ。

「みんな。じーんとくるぜ」

河村の目が潤んだ。

四人は一階にたどり着き、外へ出た。

「さっきから考えていたのだが」

近藤が腕を組みながら言った。

「この戦いに名前を付けて見ようかと思っていたのである」

「何て名だ？」

河村が聞いた。

「ネット界限では、条例改正案問題を『リアル図書館戦争』と呼んでいたのである。同名小説・アニメからとったものである」

「それなら俺も知ってるぜ」

「春雄はこう名付けたい。『東京リアル図書館戦争』と」

「なぜ『東京』をつける？」

瘦せゼロが問うた。

「日本各地で同じような戦いが起こる可能性を秘めているからである」

「いいんじゃないですか」

箕輪が賛意を示した。

最寄駅に着いた。

突然、五人に聞きなれた曲が聞こえてきた。

その一粒のしずくでさえも

花を守るかもしれない
その笑い顔ただそれだけで
差し伸べる手にもなれる
その震えてる声集めれば
風を起こすかもしれない
その命という儚き明かり
灯して足を進めよう

「これって『コードギアスR2』の最終回に流れてた奴ですよ？
てあれ、ラジカセ壊れんじゃないですか？ どこから……」

「
箕輪がきよろきよろと辺りを見渡した。『コードギアス 反逆の
ルル・シュR2 O.S.T.2』収録の『Continued
Story』である。」

「俺からの戦勝祝いだ、みんな」

五人の耳に若い男の声が届いた。初めて耳にする声に、瘦せゼロ、
箕輪、近藤は驚いた。

「お前は誰なんだ？」

河村が当然の疑問を口にする。

「俺か？ 俺は岩崎文太というもんだ」

「岩崎って、あの右翼テロの？」

岩崎文太は二ト右翼テロリストとして有名で、現職総理や閣僚たちを大量に殺害した人物である。しかし、自殺したと報じられていた。

「河村、お前は俺に似てるんだよ。これから、自分が信じた道を突き進むといい。そうすりゃ、後悔しない一生が送れる。人生は一度きり、しかも案外短いもので、いつ死ぬかもわからねえ。だから、一日一日を精一杯、一生懸命に、無駄なく無意味な日を過ごさないようにしなくちゃいけねえんだ。河村、人生を楽しめよ」

声は聞こえなくなった。

「何だったんですかね、今の？ 幽霊？」

箕輪が難しい顔をしている。

「かもな。またこの四人で何か大きなことやりてえぜ」

「五人だろ？ 私を忘れるなよ、河村」

枢が突っ込みを入れる。

「そうですね。またこのメンバーで集まって何かお祭り騒ぎを」

箕輪が頬を上気させて言う。

「全くその通りなのである」

近藤も深く頷いた。

「同感だ。それでは、私はこれで。肩を貸してくれて感謝する」

痩せゼロが河村と近藤から離れた。

「また会おうぜ」

「ああ。しばしの別れだ。皆のことは終生忘れない」

「痩せゼロ、さよならなのである」

近藤は名残惜しげな顔をしていた。

「お疲れさまでしたー。またー」

箕輪がぺこりと頭を下げる。

痩せゼロは改札口へ消えていった。

「じゃあ私も、この辺で。もう汗かきまくりで、早く家帰ってシャワー浴びたいです」

「さらばである、箕輪君」

「さらばとか、先輩、大げさですよ」

箕輪も走っていった。

「じゃあね、河村。あんたとはまた会いそうだ」

柩も去った。

「近藤さん、俺も行くわ」

「ゼロ、後で廃人無職青年のことで話し合いたいのである」

「何でだ？」

「あの者は放置できないのである。正体が工作員と知れた以上、懲らしめなければならないのである」

河村は解せない。

「ああ、そう。じゃあ、後でな」

河村も改札口で姿を消した。

痩せゼロの携帯電話が鳴っている。痩せゼロは迷わず電話に出た。

「もしもし、兄貴、今何してる？」

「ちょっとな。それより、何の用だ」

「兄貴の家の近くまで来てるんだよ。会えないかと思って。久しぶりだろ？」

「ああ、わかった、今すぐそっちに行く」

「今家にいないの？」

「残念がらな。切るぞ、潤」

何を隠そう、痩せゼロは声優・福山潤の実兄なのであった。

東京都青少年健全育成条例改正は、主民党が都議会で否決に回ったことにより、一旦落ちついた。だが、その陰に四銃士——河村英樹、近藤春雄、箕輪晴子、痩せゼロの活躍があったことは世に知られていない。

こうして東京漫画界には平和が訪れた。それはつかの間の平和かもしれない。しかし、漫画に危機が瀕するとき、再び彼らは集い、立ち上がるのだらう。

四銃士は今日も漫画のために戦いを続けている。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3235/>

『東京リアル図書館戦争』

2010年10月10日11時31分発行